

姫路城城下町跡

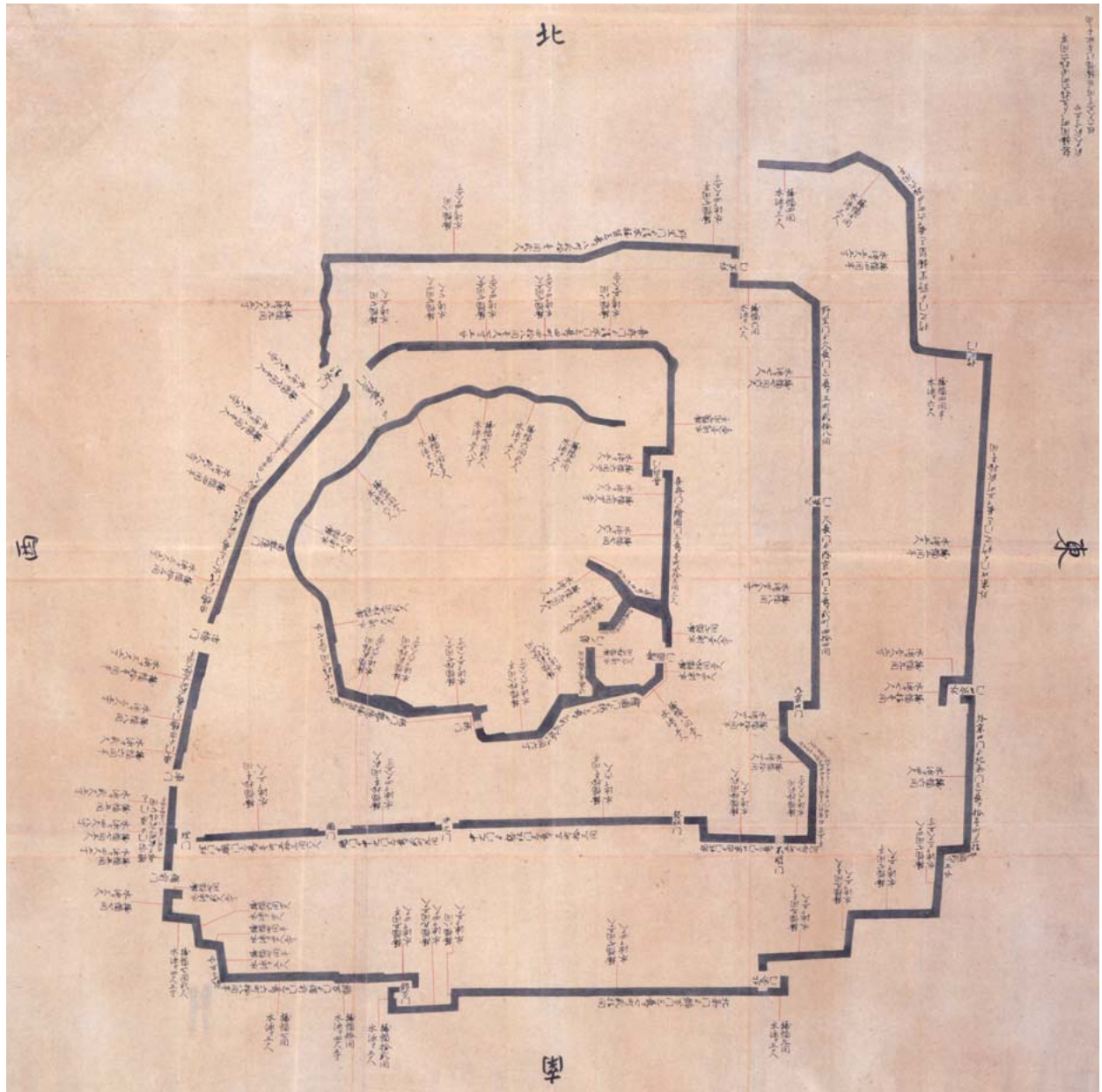
－ 姫路城跡第254次 南部中堀発掘調査報告書 －

2011.3

姫路市埋蔵文化財センター



トレンチ1 全景（北から）



姫路城郭惣堀管尺杖間数図（姫路市立城郭研究室所蔵）

姫路城城下町跡

－姫路城跡第254次 南部中堀発掘調査報告書－

2011.3

姫路市埋蔵文化財センター

序

姫路城は本市の象徴であるとともに、我が国を代表する文化遺産の一つです。江戸時代のはじめに池田輝政によって五重六階、地下一階の連立式天守が築かれて以来、400年を経た今も威容を誇っています。姫路城下町は、天守のある姫山を中心に螺旋状に巡らされた三重の堀によって、天守をはじめ城の中核の置かれた内曲輪、武家屋敷が立ち並んだ中曲輪、町人地・寺社を中心とした外曲輪に区分されています。このうち内曲輪・中曲輪の大半が世界遺産及び国の特別史跡として登録・指定され保護・顕彰が図られております。

一方、町人地を中心とする外曲輪は、江戸時代以来今に至るまで、姫路の経済の中心地として発展し、現在も播磨の中核都市にふさわしい都心づくりが進められています。そうした一画にあたる元塩町において、国・県の補助を得て発掘調査が実施され、姫路城の中堀と町屋の遺構を確認することができました。ここに当該成果を報告し、姫路城跡の調査・研究の進展に資する所存であります。

最後に事業実施にあたり、貴重なご指導・ご助言を賜りました文化庁、兵庫県教育委員会をはじめ、事業に多大なご協力を賜りました住友不動産株式会社、その他関係者各位に心から御礼申し上げます。

平成23年(2011年)3月31日

姫路市教育委員会

教育長 中杉 隆夫

例 言

1. 本書は姫路市元塩町136-1、-2、137-1、-2、138、139、140、148、149、150、151、152番地に所在する姫路城跡第254次の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は、平成20年度国庫補助事業（市内遺跡発掘調査等事業）として姫路市教育委員会が実施した。
3. 本書作成は、姫路市単独事業として行った。
4. 本書の執筆・編集は、姫路市埋蔵文化財センター 中川が行った。
5. 発掘調査平面図は世界測地系を使用し、方位は全て座標北である。標高は、東京湾平均海水準（T. P.）を使用した。
6. 土層注記に用いた色調は『新版 標準土色帳』（1999年度版）に準拠している。
7. 近世姫路城は、文化財保護法による「特別史跡姫路城跡」と周知の埋蔵文化財包蔵地「姫路城城下町跡」に区別されている。調査回数については、これを区別せず「姫路城跡第〇次」としている。また、「中堀」等の表記は、原則「堀」の字を使用するが、書名等に「濠」とある場合はこれを使用している。
8. 巻頭図版2の写真は姫路市立城郭研究室、図版1上の写真は姫路市史編集室、第86次調査に係る写真、図面等は兵庫県立考古博物館より提供を受けた。
9. 上記を除く発掘調査に伴う遺物、図面、写真等は姫路市埋蔵文化財センターが保管している。
10. 発掘調査・出土品整理および報告書作成においては、下記の方々・機関より御協力・御教示を賜った。深く感謝の意を表したい。（五十音順）

工藤 茂博、藤田 淳、三木 基弘、村上 賢治、森村 健一、山本 博利

関西近世考古学研究会、住友不動産株式会社、兵庫県教育委員会文化財室、兵庫県立考古博物館、姫路市史編集室、姫路市立城郭研究室、文化庁



本文目次

序	
例言	
目次	
第I章	調査に至る経緯と経過..... 1
第1節	調査に至る経緯..... 1
第2節	調査の経過..... 1
第3節	調査・整理の体制..... 3
第II章	遺跡の立地と外曲輪・中堀の既往の調査..... 4
第1節	遺跡の立地と環境..... 4
第2節	外曲輪における既往の調査..... 6
第3節	中堀の既往の調査..... 9
第III章	調査の結果.....13
第1節	調査区の配置.....13
第2節	トレンチの遺構と遺物.....14
第3節	試掘坪の遺構と遺物.....22
第IV章	まとめ.....27

巻頭図版目次

巻頭図版1 トレンチ1全景(北から)

巻頭図版2 姫路城郭惣堀管尺杖間数図

挿図目次

図1 調査位置図……………	2	図10 トレンチ2 堀内堆積土 出土遺物……………	21
図2 姫路城跡 発掘調査位置図……………	5	図11 トレンチ3 堀内堆積土 出土遺物……………	22
図3 第205次調査 平面図……………	6	図12 トレンチ3 平・断面図……………	23
図4 第253次調査 SK05出土遺物……………	8	図13 試掘坪 平・断面図……………	25
図5 調査区配置図……………	13	図14 試掘坪 出土遺物……………	26
図6 トレンチ1 平・断面図……………	15	図15 調査地合成図……………	27
図7 トレンチ1 堀内堆積土 出土遺物(1)……………	17	図16 既往の中堀の調査成果(第86次調査)……………	29
図8 トレンチ1 堀内堆積土 出土遺物(2)……………	18	図17 既往の中堀の調査成果(第49・94次調査)……………	30
図9 トレンチ2 平・断面図……………	20		

表目次

表1 姫路城跡中堀調査一覧表(1)……………	10	表3 姫路城跡中堀調査一覧表(3)……………	12
表2 姫路城跡中堀調査一覧表(2)……………	11	表4 出土遺物観察表……………	32

図版目次

図版1 上 南東上空より見た姫路城		図版6 上 試掘坪4 全景(東から)	
下 トレンチ1 石垣検出状況(北から)		中 試掘坪5 全景(北から)	
図版2 上 トレンチ1 堀内堆積土(北東から)		下 試掘坪6 全景(西から)	
中 トレンチ1 堀内堆積土(南から)		図版7 上 第86次調査 調査区東端(北から)	
下 トレンチ1 町屋部分(北東から)		下 第86次調査 石垣検出状況(北西から)	
図版3 上 トレンチ2 全景(北から)		図版8 上 第49次調査 東壁(北西から)	
下 トレンチ3 全景(北から)		中 第94次調査 南壁(北東から)	
図版4 上 トレンチ2・3 全景(南から)		下 第94次調査 南壁(北西から)	
中 トレンチ2 石垣検出状況(北から)		図版9 出土遺物(1)	
下 トレンチ3 石材検出状況(北から)		図版10 出土遺物(2)	
図版5 上 試掘坪1 全景(東から)			
中 試掘坪2 全景(東から)			
下 試掘坪3 全景(東から)			

第 I 章 調査に至る経緯と経過

第 1 節 調査に至る経緯

姫路市元塩町136-1ほかにおいて住友不動産株式会社による集合住宅の建設工事が計画された。当該地は、周知の埋蔵文化財包蔵地である姫路城城下町跡に含まれている。

酒井氏時代中期（文化13（1816）年以前）に描かれた「姫路侍屋敷図」と現況とを重ねた図1によれば、調査地は姫路城中堀及び外曲輪の町屋部分に該当している。このうち中堀については、巻頭図版に提示している「姫路城郭惣堀管尺杖間数図」に「堀幅拾貳間、水深六尺五寸」との記載から、現在の国道2号下に残る中堀の規模が明らかとなっている。調査地の南側にある東西方向の道路は西国街道（近世山陽道）であり、調査地のある街区東端で中堀の屈曲に合わせて北側へ折れている。また、西尾市岩瀬文庫所蔵の「播磨国総社図会」によると調査地近辺には、西国街道に面して商家が立ち並んでいる様子が描かれている。このように当該地は姫路城下町の中でも諸史料により、江戸時代の景観が明らかな数少ない地域の一つといえる。

現地には既存の建物として、敷地の中央部分に鉄筋コンクリートの集合住宅が建っており、その部分には遺構が残っていないものと判断されたが、西側と東側については、駐車場として利用されていたことから、遺構が残存している可能性があった。また、中堀については姫路城を構成する極めて重要な遺構と考えられ、本敷地で中堀が見つかった場合、保存の必要性が想定された。そのため住友不動産株式会社と中堀遺構が検出された場合、石垣を保存するように建設計画を変更することが可能かどうかを含めて事前の協議を行った。その旨の了解が得られたことから、中堀の保存を前提に平成20年度国庫補助事業（市内遺跡発掘調査等事業）として遺構の保存状況を把握するために確認調査を実施することとした。

第 2 節 調査の経過

調査は中堀想定部分に、2×10mのトレンチを3箇所設定し、敷地の南側には町屋遺構の残存状況を確認するため、2×2mの坪を6箇所設定した。

調査は平成20年4月18日に調査区を設定し、20日にアスファルト舗装版を剥ぎ取り、4月22日より東側のトレンチ3から調査を開始した。大半が攪乱であったが、最下部で石材を確認。引き続き坪3・5・6を調査した。4月25日からトレンチ1の調査を行い、石垣が検出された。26日から中堀内を掘り下げ、27日に堀底である地山を確認した。同時に坪1・2の調査も行い攪乱をほとんど受けずに町屋遺構が残存していることが確認できた。トレンチ2も調査に入ったが、コンクリート舗装版等により、盛土の除去がスムーズには進まなかった。5月2日になって原位置を保っていると思われる石材を検出した。その間、適宜図面、写真等により記録を作成した。調査終了後、埋め戻しを行い5月9日に現地を撤収した。

確認調査の結果を元に住友不動産株式会社と再度協議を行い、中堀の南岸石垣以北については現地保存を図った建設計画とすることで最終合意に至った。

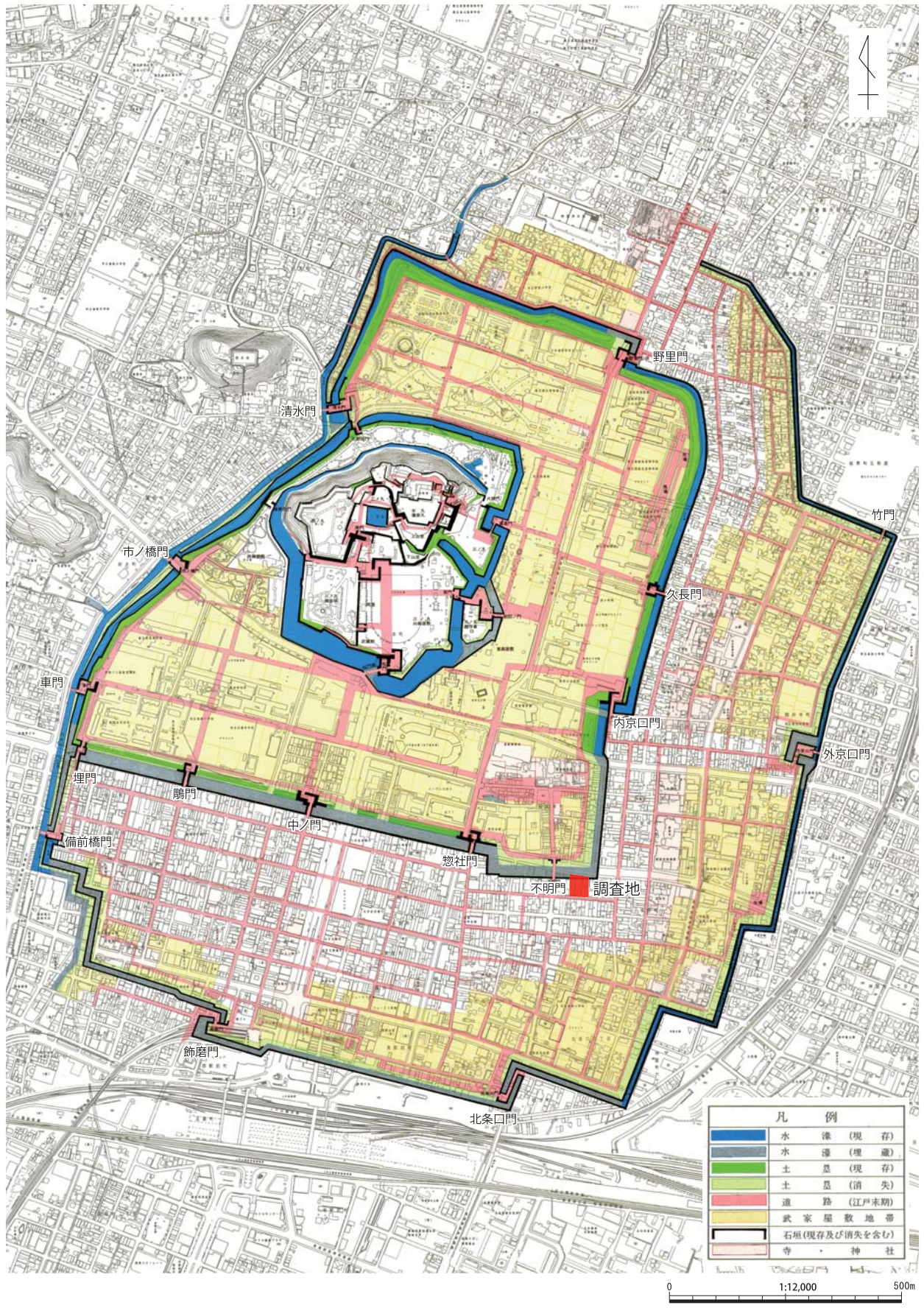


図 1 調査位置図

第3節 調査・整理の体制

調査は国庫補助事業により姫路市教育委員会が実施した。現地調査開始から遺物整理作業終了までの調査体制は以下のとおりである。

姫路市教育委員会事務局

教 育 長 中杉 隆夫 (平成22年10月5日～)
松本 健太郎 (～平成22年10月4日)
教育次長 後藤 純二 (平成21年4月1日～)
林 尚秀 (平成21年4月1日～平成22年3月31日)
小河 紀人 (～平成21年3月31日)

生涯学習部

部 長 芝原 政博 (平成20年7月1日～)
小河 紀人 (平成20年4月2日～平成20年6月30日) 次長兼務
故芳賀 秀文 (～平成20年4月2日)

埋蔵文化財センター

館 長 秋枝 芳
係 長 岸本 幸男 (庶務) (平成21年4月1日～)
大谷 輝彦 (調整) (平成22年4月1日～)
大西 文雄 (平成20年7月1日～平成21年3月31日)
小林 利夫 (～平成20年6月30日)
主 事 補 嶋田 祐 (庶務)
技術主任 森 恒裕 (調整) (～平成21年3月31日)
多田 暢久 (調整) (平成21年4月1日～)
小柴 治子 (調整)
福井 優
中川 猛 (調査・整理)
南 憲和
技 師 堀本 裕二
嘱 託 岩満 聡 (調査) (平成20年4月1日～平成21年3月31日)
整理補助員 奥田 智子、覚野 郁子、北野 弘子、香山 玲子、清水 聖子、
田中 章子、玉越 綾子、寺本 祐子、野村 知子、三輪 悠代

第Ⅱ章 遺跡の立地と外曲輪・中堀の既往の調査

第1節 遺跡の立地と環境

姫路城跡は、姫路市域を南北に貫く市川と夢前川によって形成された沖積平野のほぼ中央に立地する。市川は朝来市生野町にある三国岳（標高855m）付近を水源とし、播磨灘まで南流している二級河川である。この河川の上・中流域は侵食作用によって、河岸段丘が発達しているが、遺跡の北方にある広峰山地と市川が接する付近から南側の下流域については様相が異なっている。左岸には段丘が発達しているが、遺跡の所在する右岸については認められず、広峰山地から広がる緩やかな扇状地性の低地となっている。こうした低地では、一般的に河道が安定しておらず、姫路平野においても同様、市川あるいは夢前川の旧河道が随所に認められる〔田中・成瀬1998〕。

姫路平野は、古代より東西交通の要である山陽道が通り、更に姫路を基点として東へは丹波、有馬方面へ、西へは美作あるいは因幡へと街道が延びている。また、市川あるいは夢前川を通じて但馬あるいは山陰地方とつながっている。南側には瀬戸内海航路があり、古代以来交通の要衝であった。

こうした地理的要因を背景として姫路城は成立した。姫路城は池田輝政により、慶長6年から同14年までかけて平野部と独立丘陵である姫山・鷲山を利用して造られた平山城である。独立丘陵は標高約50m、平野部は18～11mを測る。市川の支流である船場川を西限とし、姫山・鷲山を囲うように内曲輪、中曲輪、外曲輪と縄張りされている。内曲輪には天守閣群が、中曲輪には主に武家屋敷が、外曲輪には町人地、寺社地、武家屋敷等が配された。

調査地は、外曲輪内に中堀が大きく南側に張り出している部分に位置している。姫路城下の町割には基準軸がいくつか設けられているが、調査地の周辺の町割はそのうち「総社ライン」（約N5°E）を基準としている。また、付近の町名には「元塩町」や「古二階町」などがあることから、池田氏以前からの町屋の存在が指摘されている地域の一つである〔堀田1988〕。

中堀は現在、便宜的にその方角により区分している。野里門から清水門までを北部中堀、清水門から埋門までを西部中堀、埋門から不明門を越え中堀の屈曲する部分までを南部中堀、その部分から野里門までを東部中堀と呼称している。

このうち北部中堀・西部中堀と東部中堀の大部分については、廃城後空堀化していたが、史跡整備等により、水が巡らされ往時の景観に復元されている。しかし、今回調査を行った南部中堀と東部中堀の一部については、国道2号の敷設や公共用地の確保等の様々な理由から埋め立てられ、現在に至っている。埋立はまず、明治45年に総社門から歩兵第39連隊南側（鷲門付近）まで行われた。その後、大正14年と昭和2年に総社門から内京口門を、昭和7年に埋門から歩兵第39連隊南側を埋め立てた。昭和8年には、その上に現在の国道2号が開通している〔姫路市史1988、橋本1978〕。調査地周辺の中堀が南へ張り出した部分については、国道2号を直進させるため、土塁の切り崩しも行われた。その際には、陸軍の抵抗などもあり、埋立はスムーズには運ばなかったようである〔工藤2002〕。姫路において産業博覧会が行われた大正15年の空中写真（図版1上）には調査地周辺の中堀が写っていることから、当該部分は昭和2年に埋められたものと考えられる。

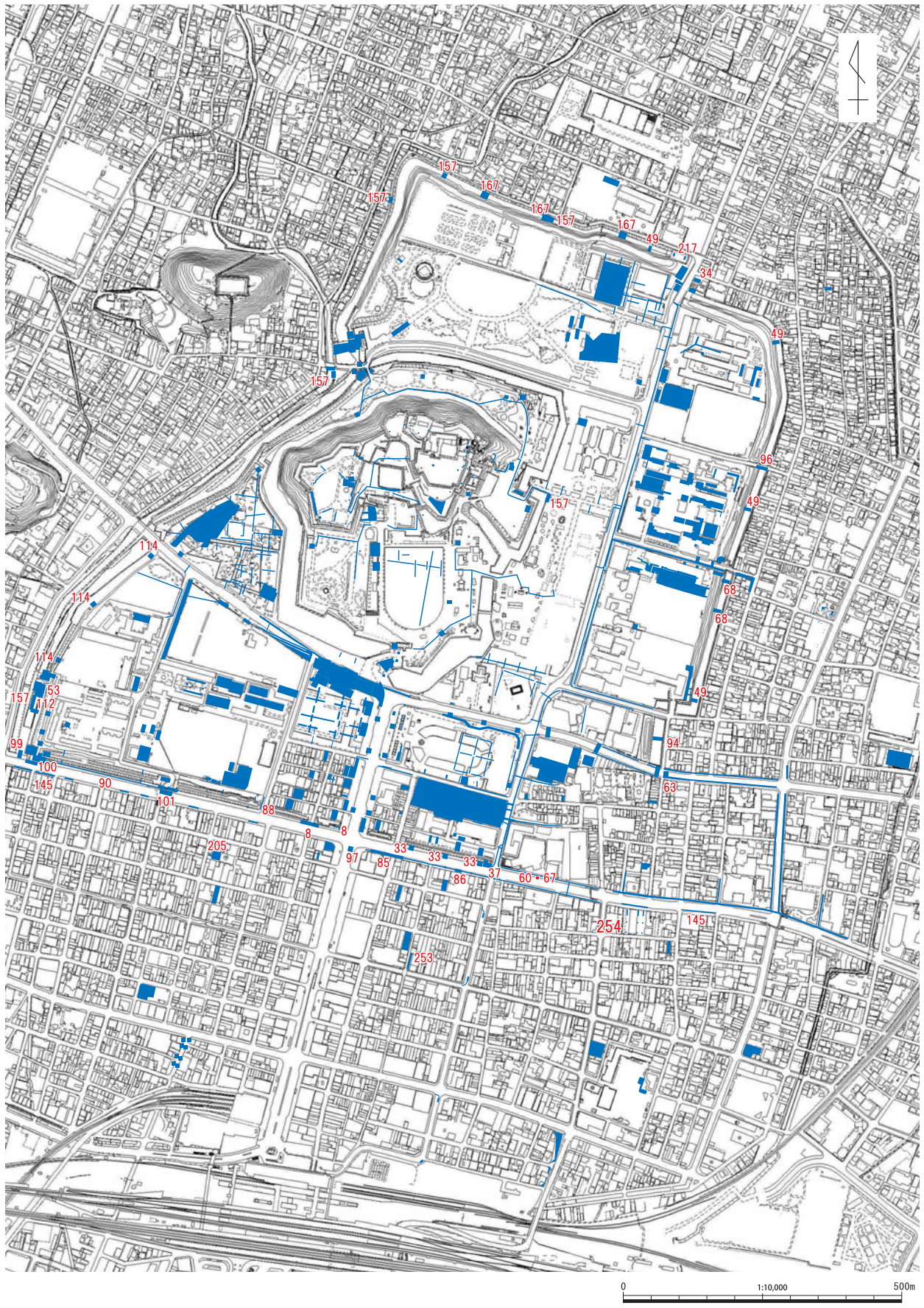


図2 姫路城跡発掘調査位置図（本報告書で触れるもののみ次数を表記）

第2節 外曲輪における既往の調査

外曲輪（姫路城城下町跡）において本格的な発掘調査が行われたのは、比較的新しく平成13年度に実施した第205次調査からである。それ以前にも建物の建築に伴う確認調査は随所で行っていたが、面的に遺構を把握するまでには至らなかった。ここでは、第205次と第253次調査の概略を述べ、現段階での町屋部分の考古学的な知見を紹介しておきたい。

第205次調査

調査地は姫路市本町に所在し西国街道に近接した町屋の裏に該当する。調査面積は210㎡である。調査地付近は酒井氏時代初頭に描かれた「姫路城下町諸絵図」によれば、表地口約4～5間、裏行約18間5尺の南北に長い長方形の町屋によって構成されていたことがわかる〔姫路市史1991〕。これを現況と比較すると表地口部分は戦災復興の区画整理等により改変を受けているが、裏行については江戸時代の町割が生きていることがわかる。この点は、町屋部分全体について概ね当てはまる。

検出された遺構は町屋の区画遺構と井戸、埋甕、土坑等である。江戸時代後半の遺構が大半である。町屋の区画遺構には石組み、石列と石組み溝とがある。調査区西側の石組みは、40～50cmの割石を3～4段積んでいる。西側に面を持ち、基底石から天端まで80cmを測る。この石組みの下位からは17世紀代の遺物が出土しており、それ以後の構築であることが判明した。これを遡る区画遺構は検出されていない。また、下部2段と上段部とではズレがあり、構築の時期差あるいは積み直しが想定できる。東側で検出された石組み溝は18世紀には埋められており、この時期に屋敷割りの改変があり、先にみた石組みのズレもこの時期に生じた可能性がある。更に、中央の石列は石組み溝の埋没後に作られていることから、町屋内で少なくとも4回の屋敷割りの改変があったといえる。また、調査地の西端で前述の石組みを超えて水琴窟を配し、手水用と考えられる甕や飛び石とみられる配石のある近代の庭が検出されているなど、現代に至るまで度重なる敷地の改変があったことが判明した。

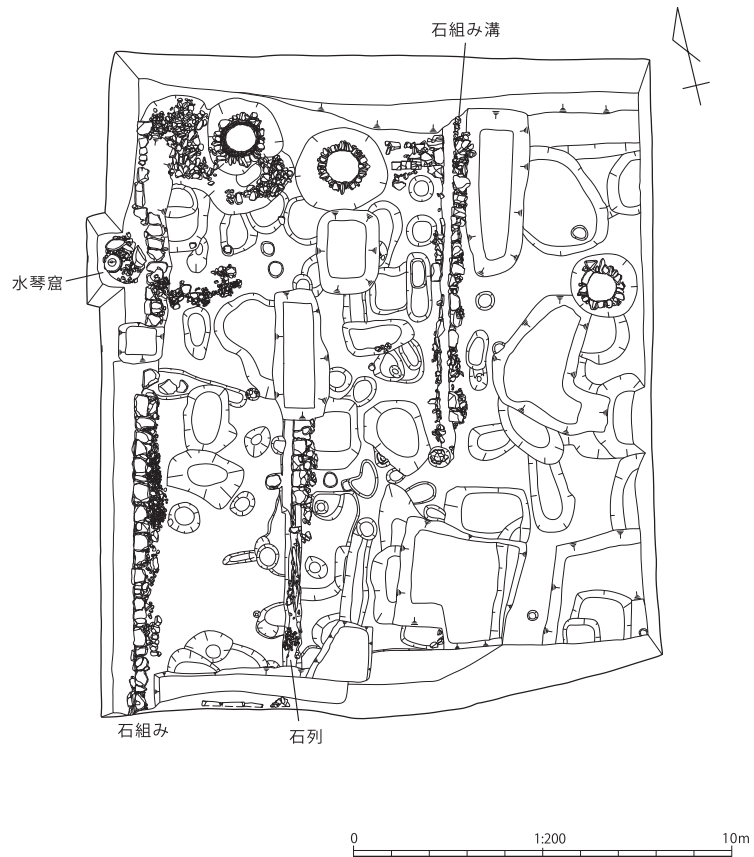


図3 第205次調査 平面図

姫路城跡においては、これまで発掘調査の中心であった中曲輪内の武家屋敷地からは、隣接する屋敷の間を区画する遺構の検出は少ない。17世紀の前半には素掘りの溝による背割り遺構が、淳心学院地点〔姫路市教委2007〕や姫路医療センター地点〔姫路市教委2001・2003・2004〕の調査で見ついているが、それ以後になると兵庫県立歴史博物館地点〔兵庫県教委1985〕でわずかに見ついているものの明確には検出されなくなる。このことは、姫路藩において武家屋敷地が拝領によるもので、拝領の度に屋敷地の大きさが変更されている場合もあることから、石組み等による恒久的な施設ではなく、生垣や柵等によるより簡便な、遺構としては検出しにくい施設であった可能性もある。これに対して第205次調査に見るように町屋においては、建物の基礎という側面も考慮する必要もあるが、時代が下るにつれて石組み等で構築された敷地の境が明確に検出されるようになる。一軒毎の敷地が考古学的に明らかに出来る点は武家屋敷地とは対照的な現象である。

第253次調査

姫路市呉服町において60㎡を調査した。石列、井戸、土坑、赤化面等を検出した。建物跡等が見つからないことから、敷地内の空間構成は不明であるが、いずれの遺構からも鉄滓あるいは鞆の羽口、砥石など鍛冶関係の遺物が大量に出土し、その組成も単純であることから居住者は専門の鍛冶屋であったと考えられる。また、17世紀初頭と18世紀前半の遺物を欠くが、それ以外の時期については、遺物が確認できることから江戸時代を通じて鍛冶屋であったといえる。調査地は絵図によれば第1次榊原氏時代（1649～67）には「東紙屋町」、それ以後は「中呉服町」とある〔姫路市史1986〕。従来、鍛冶職人は城の東北にある「鍛冶町」に居住していたと考えられていたが、この調査により城下町形成の早い段階から鍛冶職人が町名にしばられることなく居住していたことが判明した。

検出された石列は第205次調査と同様、隣地との屋敷境にあたる。石列の下位から17世紀後半の鍛冶遺構が検出されたことから、それ以降、少なくとも3回の積み直しを経ていることが確認された。この石列は現在の敷地境界とほぼ合致していた。

土坑と井戸からは鍛冶に関する炭化物や鞆の羽口、鉄滓が大量に出土している。これらの土坑は鍛冶にともなう遺物を捨てた廃棄土坑である。出土遺物の組成が単純である点から、鍛冶作業中に廃棄土坑として常時開口していたとは考えにくく、ある時点で掘られ、一括して廃棄したものと考えられる。いずれも直径約2mの円形を呈し、深さは遺構検出面から1mを測る。このうち1基の土坑（SK05）から出土した遺物には紀年銘資料が含まれているので、ここで報告する。

1は肥前陶器の皿である。内面に鉄絵、砂目跡が認められる。2は肥前陶器の皿である。内面には鉄絵で鳥文を描く。見込に砂目跡。3は染付輪花皿である。文様は退化しているが、竹兎文であろう。内面には型打ち成形による浅い凹みがあり、外面の口縁端部をわずかに凹ませている。外面には焼成前に呉須で「正大夫 は□ 友之介」と書いている。4は青花皿である。型打ち成形により内面にわずかに花卉の凹みが認められる。畳付には砂が付着。5は底部糸切りの土師器皿である。6は備前焼播鉢の底部である。斜め方向の播目が観察できる。7は丹波焼の鉢である。口縁端部はシャープに作られ、直線的な内傾斜面となり、外側に拡張している。破片であるため把手の有無については、不明

である。8は土師質の焙烙である。外面には右上がりの平行タタキが施され、その上部に粗いナデにより1条の凹線が巡る。口縁端部は内側にやや面を持ちながら、丸くおさめている。9は轆の羽口である。基部を欠損しているため全形は不明である。外面はナデによる仕上げを行っている。外形は先端から基部にかけてほぼ直線であり、孔形も外形に平行である。胎土には砂礫を含むが、目立つものではない。スサを含んでいる。先端から約8cmまで赤く変色し、先端約3cmにはスラグが付着。外面には「兼應」「九月」と焼成前の線刻があり、承応年間（1652～1654）の年紀を記す。

この土坑（SK05）の組成は肥前陶器、肥前磁器、青花、斜め播目の備前焼、右上がりの平行タタキを有す焙烙等であり、轆の羽口の年号と矛盾はない。

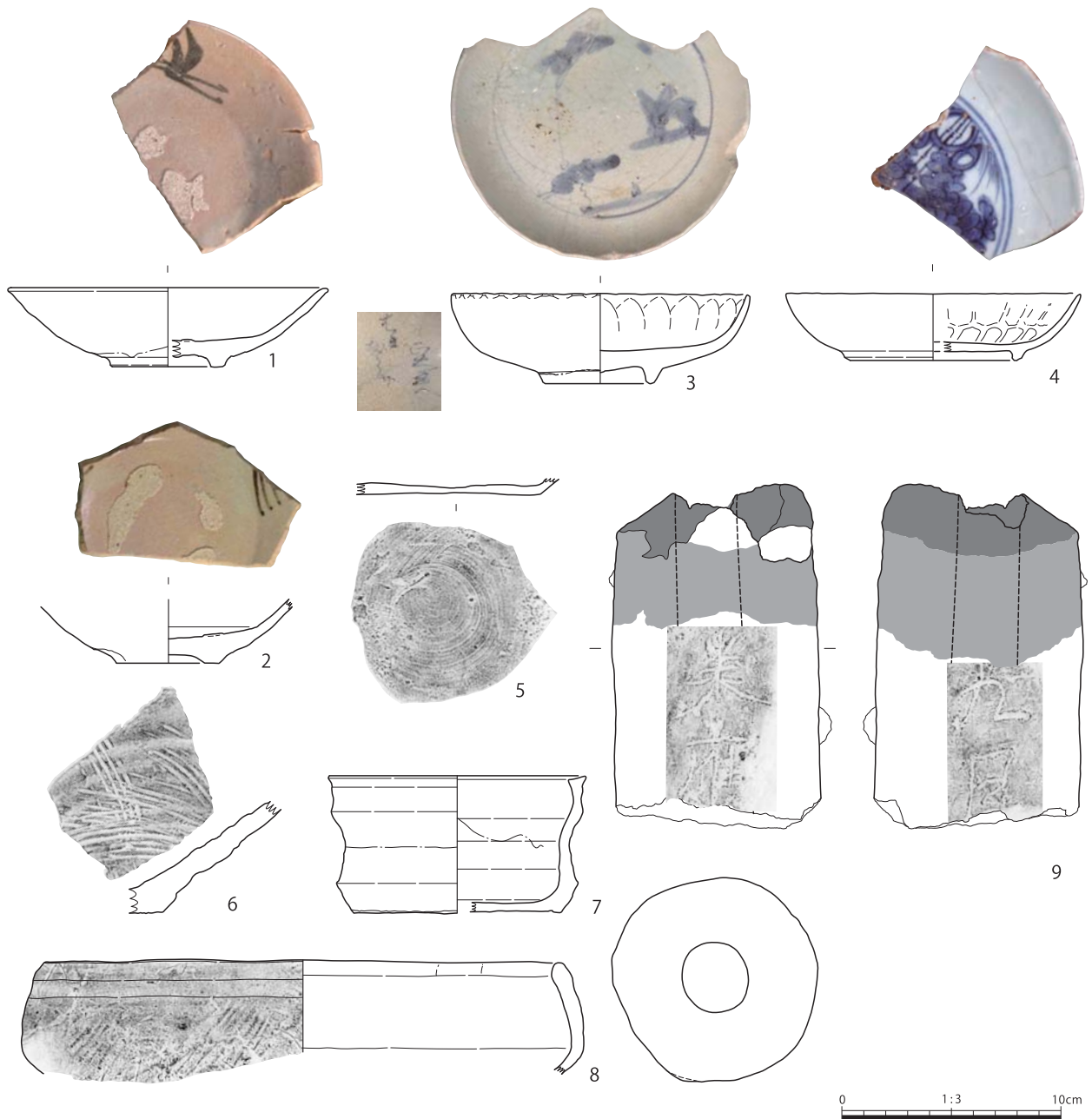


図4 第253次調査 SK05出土遺物

第3節 中堀の既往の調査

中堀に関連する調査は、これまで計26次にわたって行っている。史跡整備や国道2号線の整備等に伴ったトレンチ調査によるものが多い。また、中堀に開口した城門跡の石垣修理やそれに伴う調査も行っているが、表1～3には、直接中堀に関係しないものについては載せていない。

姫路城中堀について、最初に調査が行われたのは、昭和53年度の第8次調査である。調査が行われた地点は、明治45年に最初に中堀が埋められた箇所にあたり、埋立より66年後のことである。この調査は国道2号の拡幅に伴うもので、その後、第33・37・60・67・85・86・90・99・100・101・145次が国道2号に関連する調査として継続していく。これらの調査によって南部中堀及び門跡に関する様々な考古学的知見が得られている。第8・33次調査では、堀の埋立に際して土塁裾を約2～3m削りこんでいることが判明した。また、第8次調査では、中ノ門につながる土橋の両側面の石垣が検出され、土橋の幅が10.7mであることが明らかとなるとともに、土橋内に地山が確認できたことから、地山を掘り残して構築していることも判明した。その後、第100次調査では埋門につながる土橋の両側面の石垣が検出され、幅は約12m、第101次調査でも鵬門につながる土橋の幅が、9.9～10.1mであることが確認された。第85次調査でも規模は不明ながらも総社門の土橋へつながる石垣が検出されている。土橋に使用された石材は、いずれも幅0.6～1.2mを測り、後述する南岸石垣よりも大きい。

南部中堀北岸については、これまでの調査成果と絵図の検討から城門周辺のみ石垣とし、他は土塁であったことが判明している。対して中堀南岸については、第60・85・86・90・97次調査において石垣が検出され、絵図にも石垣の表現があることから、全体が石垣によって護岸されていることが判明した。また、埋立時やその後の開発により、一部は破壊されているものの基本的には残存していることが明らかとなっている。使用石材は幅20～60cmと城門や土橋に使用された石材よりも小さく、いずれの地点でも石垣の積み直しが想定されている。

埋め立てられた南部中堀以外の堀については、現状でその遺構が残っているため、史跡整備を順次行い、その過程で基礎資料を得るための確認調査を実施している。東部中堀に関しては、昭和61年度に『姫路城跡東部中濠保存整備調査報告書』に基づいて、空堀から水堀へと景観復元が計画された。その基礎資料を得るために第49・68・94・96次調査が行われ、堀と土塁の関係、既存石垣と本来の石垣の確認がなされた。北部・西部中堀についても第53・99・112・157・167・217次調査で基礎的なデータが得られている。そのうち、第99・167次調査では勾配50～60度を測る石垣が検出された。これは、南部中堀の第85・86次調査で検出した石垣や東部中堀における現存石垣の勾配が80度前後であるのに比べてもかなり緩い勾配といえる。また、第112・157次調査においては、二重に石垣を構築していることが判明した。更に、第157次調査では、船場川と中堀を区画する堤防遺構も確認されている。このように、船場川に面した北部中堀の一部と西部中堀については、それ以外の堀と様相が異なることも明らかとなってきている。この点については、船場川の影響をまともに受けるという立地から、補強構造である可能性が指摘されている〔山本1997〕。また、第99・112・157次調査で検出された石垣については、いずれも古式の様相を呈しているとされるのも、積み直しが指摘される南部中堀とは異なった特徴といえよう。

表1 姫路城跡中堀調査一覧表(1)

調査回数	調査期間	面積	概要
第8次	1978.10.23～ 1979.5.29	272㎡	国道2号の拡幅工事に関連して行った調査である。調査は、現存する石垣の本来の位置関係と土塁の裾部を確認することを目的として行われた。調査の結果、現存する高石垣は中ノ門の東端部であること、土塁は本来の裾が約2m削られていることなどが明らかになった。また、中ノ門につながる土橋の東西両側面の石垣が検出されており、土橋の幅が10.7mであることも判明した。石垣裏込栗石幅は約1mを測り、その背後に地山が検出されたことから、土橋は地山を掘り残して構築された可能性を想定している。(文献9)
第33次	1983.12.12～ 12.14	85㎡	国道2号の拡幅工事に関連して行った南部中堀の土塁裾部の調査である。土塁と中堀の境を明確にすることを目的として行った。調査の結果、本来の土塁裾が2～3m削られていることが確認された。このことは第8次の成果とも矛盾せず、堀を埋める際に土塁裾を削っていたことが判明した。(文献1・9)
第34次	1983.12.12～ 12.26	14㎡	鍵町で行った野里門に近接する東部中堀の調査である。野里門外門の北側石垣および中堀の堆積土が確認されている。(文献9)
第37次	1984.7.2～ 9.26	162㎡	国道2号整備事業に伴う南部中堀に面した総社門跡の調査である。総社門西部の石垣の位置及び構造に関する資料を得ることを目的として実施した。調査の結果、中曲輪から中堀への排水溝を確認するとともに、水面下の中堀石垣の前面には石垣の緩みを防ぐための栗石が多数認められるなど、中堀と石垣の関係が明らかとなった。(文献2・9)
第49次	1986.6.3～ 6.25	320㎡	空堀化していた東部中堀を水堀へ復元するための基礎資料を得る目的で行われた確認調査である。以下68次、94次、96次と継続して実施した。北部中堀で1ヶ所、東部中堀で3ヶ所にトレンチを設置した。調査の結果、堀底である地山が確認でき、東部中堀の北と南では堀底のレベルに約1mの差があることが判明した。また、堀内堆積土は後世に大規模な浚渫を受けた箇所を除けば2m前後の厚さがあることが明らかとなり、江戸時代の木簡をはじめとする木製品、陶磁器等が大量に出土した。なお、この調査では、調査区の制限から堀の石垣は確認できていないものの、各所において土塁際を含む堀の断面が得られている。(文献9)
第53次	1987.3.2～ 3.14	37㎡	船場川河川整備に伴って西部中堀で行った調査である。車門の中門想定部西側の石垣部で石階および土塀基礎が検出された。さらに、外門想定部の右手枡形内では石組会所が検出され、南側の中堀石垣に開口部が設けられており、約4mの暗渠を通じて中堀に排水する構造になっている。(文献9)
第60次	1987.8.7～ 8.27	90㎡	国道2号の整備事業に伴う試掘調査。調査は兵庫県教育委員会が実施した。19箇所の試掘坪を設定し、南部中堀の南岸石垣が検出された。検出面の深さは現地表から0.9～1.2mで、石垣の上面は後世の攪乱を受け破壊されている箇所もあった。この成果に基づき、工事の設計変更をおこなったが、設計変更が不可能な部分のみ全面調査を行うこととなり、67次、85次、86次と継続する。(文献9)
第63次	1987.11.20～ 12.4	40㎡	管路新設事業に伴う調査である。東部中堀の石垣の確認を主要な目的として調査を実施したが、遺構は検出されなかった。(文献9)
第67次	1988.2.18～ 3.3	46㎡	60次調査に基づいての調査。上部は攪乱を受けていたものの少なくとも1段から2段の中堀南岸石垣は遺存していた。延長約27m分検出されるとともに、調査区の東端で中堀が南へ屈曲する部分が検出されている。(文献9)
第68次	1988.3.1～ 3.19	73㎡	49次調査で明らかにできなかった東部中堀の東岸石垣の保存状態を確認する目的で行われた調査である。中堀の東に当時、隣接していた道路に設定したトレンチから、石垣あるいは石垣の痕跡と思われる遺構が検出されている。(文献9)

表2 姫路城跡中堀調査一覧表(2)

調査回数	調査期間	面積	概要
第85次	1988. 12. 5～ 12. 20	127㎡	60次の成果に基づき、67次に引き続いての調査である。総社門西方の中堀南岸の石垣が約51m検出された。また、外曲輪から中堀に排水する排水口も検出されている。検出された石垣は、下段の石は幅40～50cm、上段の石は幅20～40cmと小さい傾向にあることも明らかとなった。また、一部には最下段の石が、堀の底より浮いている事例も確認された。石垣の前面も非常に波打っており、下段の石ほど堀の方向へ飛び出しており、上段の石垣よりも50cm～1m弱前面へ出ているものもあった。(文献3・9)
第86次	1989. 1. 6～ 1. 14	52㎡	第85次に引き続いて行われた調査である。総社門西側の中堀南岸石垣が延長13.5m、4～7段分検出された。石材の大きさは最下段の石が幅50～60cmと最も大きく、下から1～3段は4段目以上の石よりも大きいものを使用している。このことから石垣の上段は積み直しが行われているものと推測されている。また、断ち割りによって、堀の落ち込みの肩となる黄褐色砂礫を検出しており、最下段の石がこの層より浮いていることを確認した。石垣の前面も非常に波打っており、下段の石が上面石垣よりも50cm～1m弱前面へ出ているという、第85次で確認された事象が追認されている。(文献4・9)
第88次	1989. 2. 4～ 2. 7	56㎡	管路新設に伴い調査を行った。南部中堀の堀底が確認されたが、土塁基底部は攪乱のため、確認されなかった。(文献9)
第90次	1989. 7. 10～ 7. 30	66㎡	管路新設事業に伴う調査である。埋門東側の中堀想定部で調査を行った結果、堀底は現道路面から2.8～3.3m下であることが判明した。国道2号をはさんで南側の中堀の対岸にあたる調査区からは、残存高1.2mを測る南岸石垣が検出されている。(文献6・9)
第94次	1989. 10. 20～ 10. 24	115㎡	49次、68次につづく調査である。東部中堀の内京口門南側でトレンチ調査を行った。その結果、堀底を含む、土塁から石垣までの堀の断面をおさえることができている。(文献9)
第96次	1990. 1. 20～ 1. 30	67㎡	94次に引き続く中堀還流整備事業に伴う調査である。東部中堀の西側土塁基底部が検出されたが、中堀東側の石垣は攪乱が著しく確認できていない。(文献9)
第97次	1990. 2. 10～ 3. 28	32㎡	大手前地下駐車場建設に伴う調査である。南部中堀南岸の石垣が3段分検出された。一部であるため、高さ等は不明であるが、石材の大きさ、積み方は第60・67・85・86次で検出された石垣と類似している。(文献9)
第99次	1990. 3. 1～ 3. 20	60㎡	国道2号整備事業に伴う調査である。西部中堀西側の石垣が約7m分検出された。50cm前後の凝灰岩を使用しており、検出部の高さは2.0～2.5m、傾斜角度は50～60度を測る。この石垣は構築技法等からみて、江戸時代前期の遺構である可能性が指摘されている。(文献9)
第100次	1990. 4. 20～ 5. 20	169㎡	国道2号整備事業に伴う調査である。埋門につながる土橋約7m分を検出した。土橋の東西両側の石垣が数段分残っており、土橋の幅は約12mと判明した。また、この門は池田氏時代には構築されておらず、第1次本多氏時代に構築された可能性が想定されており、調査ではそれを裏付けるように枡形内の下位2.1mから堀内の堆積土が確認され、出土した遺物の時期も矛盾していない。(文献8・9)
第101次	1990. 6. 15～ 6. 20	108㎡	国道2号整備事業に伴う調査である。鵬門南側で土橋の東西両石垣を検出した。土橋の幅は9.9～10.1mであることが判明した。石垣の現存部最大高は約2mで0.6～1.2mの石材を使用していた。(文献5・9)

表3 姫路城跡中堀調査一覧表(3)

調査回数	調査期間	面積	概要
第112次	1991. 10. 11～ 11. 16	105㎡	西部中堀の史跡整備事業に伴う調査である。堀底の深さ、堀幅等、整備を行ううえでの基礎資料を得るために発掘調査を実施した。調査の結果、現状の石垣の内側から新たに石垣が検出され、当該部の中堀は現在とはやや異なった形状を有していたことが判明した。検出された石垣は、現状の石垣の2.0～2.2m内側に構築されており、保存状態はきわめて良好である。検出石垣の高さは1.3～1.6mを測り、その石積技法は現状の石垣とは明らかに異なり、構築時期は不明であるが、比較的古式の様相を保っている。土層断面の観察によると、本来の水位は検出石垣の上面付近であったと思われる。検出石垣と現状石垣の間は通路として機能していたものと考えられる。(文献6・9)
第114次	1991. 10. 11～ 12. 20	100㎡	西部中堀の史跡整備事業に伴う調査である。西部中堀に面した石垣に数箇所の暗渠開口部があることから、排水に関する遺構の確認を主要な目的として調査を行った。調査の結果、土塁基底部分において石組みの暗渠および大型の石組会所が検出された。これらの遺構は中曲輪から出た生活排水等を中堀に排出するための施設と想定される。(文献7・9)
第145次	1994. 12. 1～ 1995. 2. 15	176㎡	キャブシステム建設に伴う調査である。現歩道面から-90cmで埋門土橋に伴う石垣が検出されている。(文献10)
第157次	1995. 8. 29～ 11. 27	318㎡	内堀～中堀の濠浄化対策工事に伴う確認調査である。清水門跡の南方で西部中堀と船場川を分ける堤防遺構を検出した。堤防遺構は上面の張石部分は失われていたものの、断ち割り調査によってその構築過程が判明している。すなわち、旧船場川床に2列の石列(2～3段積み)の石垣を設け、それを淡黄色粘質土で被覆し堤防の芯とし、その上から黄色土を厚く搗き締めてほぼ全体の形を成形したのち、亀甲状の貼り石を施し完成となる。車門以南の西部中堀においては、第112次調査で判明した2段石垣を検出している。この2段石垣は船場川の影響を受けがちな西部中堀特有の補強構造と想定され、構築時期も本多氏時代と推定されている。(文献11)
第167次	1997. 1. 8～ 1. 22	60.5㎡	第157次に引き続き、濠浄化事業に伴う調査である。第49次調査において北部中堀の石垣は検出されなかったが、掘方は確認できたため、残存する石垣の検出と構造確認を目的とした。調査の結果、石垣が確認され、最も残りの良い場所で約7段分の石垣が検出された。高さは約1.5m、勾配は約58度を測る。基底部分の2段は凝灰岩質の比較的大きな石材を使用し、3段目から上部は小ぶりの石材を使用しており、積み直しが想定されている。また、確認された石垣の根入れは堀底レベル(地山)に比べて浅い傾向があることも認められた。(文献12)
第217次	2003. 7. 17～ 10. 14	20㎡	中堀復元整備の基礎資料を得るための確認調査である。攪乱のため、石垣等は確認できなかったが、堀堆積土が一部で確認されている。(文献13)

一覧表の作成にあたっては、下記の文献を引用、参考にした。

- 文献1 山本博利・秋枝 芳 1986 「特別史跡姫路城跡(南部中堀)」『兵庫県埋蔵文化財調査年報』昭和58年度 兵庫県教育委員会
 文献2 矢内 澄・山本博利・秋枝 芳 1987 「姫路城総社門跡」『兵庫県埋蔵文化財調査年報』昭和58年度 兵庫県教育委員会
 文献3 吉識雅仁・村上賢治 1988 「姫路城中濠跡(みゆき通り前)発掘調査実績報告書」 兵庫県教育委員会
 文献4 吉識雅仁・村上賢治 1988 「姫路城中濠跡(東邦生命前)発掘調査実績報告書」 兵庫県教育委員会
 文献5 大谷輝彦・森 恒裕 1992 「特別史跡姫路城跡 鷗門国道2号線整備事業(第101次調査)」『城郭研究室年報』Vol.1 姫路市立城郭研究室
 文献6 工藤茂博・森 恒裕 1992 「特別史跡姫路城跡 西部中堀史跡整備事業(第112次調査)」『城郭研究室年報』Vol.2 姫路市立城郭研究室
 文献7 工藤茂博・森 恒裕 1992 「特別史跡姫路城跡 西部土塁史跡整備事業(第114次調査)」『城郭研究室年報』Vol.2 姫路市立城郭研究室
 文献8 姫路市立城郭研究室編 1993 「特別史跡姫路城跡 埋門石垣修理工事報告書」 姫路市
 文献9 姫路市立城郭研究室編 1994 「日女道かがみ」姫路市立城郭研究室
 文献10 山本博利 1996 「姫路城跡・国道2号線 キャブ建設事業(2)(第145次調査)」『城郭研究室年報』Vol.5 姫路市立城郭研究室
 文献11 山本博利 1997 「特別史跡姫路城跡・内～中堀 濠浄化対策事業(第157次調査)」『城郭研究室年報』Vol.6 姫路市立城郭研究室
 文献12 山本博利 1998 「特別史跡姫路城跡・中堀 濠浄化対策事業第2次調査(第167次調査)」『城郭研究室年報』Vol.7 姫路市立城郭研究室
 文献13 森 恒裕 2006 「特別史跡姫路城跡・北部中堀整備事業(第217次調査)」『城郭研究室年報』Vol.15 姫路市立城郭研究室

第Ⅲ章 調査の結果

第1節 調査区の配置

調査は、中堀想定部分については2×10mのトレンチ調査とし、絵図の検討から中堀が想定される位置を中心にして設定した。町屋部分については2×2mの試掘坪を設定した。中央の既存建物をはさんで西側にトレンチ1を、試掘坪は北から1、2と呼称した。西側の敷地には既存のカーポートがあるため、その配置は東側に片寄っている。東側の敷地には西側よりトレンチ2・3を平行して配置し、トレンチ2の南に北から試掘坪3・4を、トレンチ3の南に試掘坪5・6を設定した。



図5 調査区配置図

第2節 トレンチの遺構と遺物

トレンチ1

調査区内の西北に位置する。調査区の層位は、表層のアスファルト（約5cm）、盛土（約60cm）、戦災焼土を含む整地層（約5cm）からなる近現代層を経て、明治時代～江戸時代の遺構面に至る。

トレンチ北端から南へ4mの位置で中堀の南岸石垣を7～8段検出した。石垣に使用されている石材の大きさは、最も大きいもので幅約50cm、小さいもので約30cmを測る。厚さは最下段から4石までは10～15cm、それより上部は20～25cmと下部の石材の方が扁平である。下部は割石を使用しており、上部は河原石と割石とを混在して使用している。石垣は中段付近が前方へはらんでいる。石垣の天端は攪乱により乱されていたため、本来の天端の高さは不明である。検出した石垣の最上面から石垣の最下部までは約1.3mを測り、最下段の石材下部の標高は11.4mである。

石垣の前面には中堀を最終的に埋めた、昭和2年の山土（2層）とコークス殻の混じる土砂（3層）が約1m確認された。その下部には、堀開口時に堆積した土砂が約1.8m確認された。堆積土の細分は可能であるが、大きく上部堆積土（8～10層）と下部堆積土（11層）とに分けることができる。その境は最下段の石垣のほぼ前面にあたる。この下部堆積土は石垣の下にも潜りこんでいる。今回の調査は石垣の保存を前提としていたため、崩壊を恐れ、下部の掘削または断ち割りを行っておらず、この堆積土と石垣との関係についての詳細は明らかでない。ただし、ピンポールで確認した範囲では、検出した石垣より下部に別の石材は確認できないことから、最下段の石垣は下部堆積土の上位に構築された可能性が高い。

石垣より下位の下部堆積土の掘り下げは安全面から約1m四方にとどめた。現地表から3.25m下がる標高10.5mでグライ化した地山（堀底）が確認された。確認した位置は、石垣前面から北へ1mの位置である。このことから堀底は石垣から約1m下にあることが判明した。

町屋部分については、中堀石垣の南側約1mのところ幅30～50cm、控長約30cmを測る凝灰岩の割石を使用した石列が検出された。石列の上部には延石も検出されたことから、この石列までが町屋の屋敷地であったと考えられる。この石列と南岸石垣の間は約1mを測り、建物等のない空地であろう。現段階では、この間を犬走りのものとして想定しておく。ただし、後述するトレンチ2・3は攪乱を受けており、この延長が確認できていないため、その性格の解明については、今後の調査に期待しておきたい。この延石より南側の屋敷内については遺構の検出のみに留め、掘り下げは行っていない。わずかに攪乱を受けているものの、全体的に第2次世界大戦時の戦災焼土の整地層の下は良好に生活面が残存していることが確認できた。

堀内堆積土からは、限られた範囲ながら、多くの遺物が出土した。土器、陶磁器のほかに堆積環境から木製品などの有機質の出土も顕著であった。1～16、22～25は上部堆積土、17～21、26～28は下部堆積土からの出土である。

1は緑色透明のビー玉である。内部には気泡が目立つ。2は小型の茶色透明のコルク栓の瓶である。合わせ目は確認できない。3は深い緑色透明の蓋である。つまみから底にかけて合わせ目があり、内



図6 トレンチ1 平・断面図

外面ともすじが認められる。4は無色透明、低い円筒形のコルク栓のインク瓶である。底面には円で囲まれたMの陽刻がある。底部から首部にかけて合わせ目を確認でき、口縁部内面にはすじが残る。5は緑色透明の円筒形のコルク栓のインク瓶である。底面にアルファベットの陽刻が認められ、底部から首部に合わせ目が延びる。6は淡緑色半透明の円筒形のガラス瓶である。栓はスクリュウ栓で、合わせ目は底部から口縁部まで延びている。底面に「□久代糊」の陽刻がある。7は茶色透明のいかり肩のビール瓶である。王冠栓で、底には浅いキックが、胴部から口部にかけて合わせ目が認められる。表面にはすじ及び気泡が目立つ。胴部下端には、陽刻があり「商標◎登録 大日本麦酒株式会社醸造」とある。大日本麦酒株式会社では大正4年頃に王冠栓が定着している〔桜井2006〕。8は薬夾である。9は木製のブラシの柄である。外面に「TOKUYOUHIN」と刻印があり、端部に欠損しているが、結合金具が認められる。10はプラスチック製の歯ブラシである。中央16穴、左右にそれぞれ15穴ある。毛は抜けて確認できない。11は陶製徳利である。イッチンにより三方に文字、下部が欠けているため判読できるのは、それぞれ「寅」「非□」「山等□」である。内面には成形時の段が残る。12・13は「姫路本」「彌 本家」の刻印があることから、弥七焜炉の下部片であろう。14は肥前系磁器の青磁染付輪花鉢である。白子による焼継が認められる。高台は蛇ノ目凹形高台で、高台内に朱書で「九八」とあり、焼継印の可能性がある。15は磁器碗である。畳付には砂付着、高台内は高台脇に比べて深い。外面には、「米華 山岡」とある。16は堺・明石系の播鉢である。口縁部は段があり、外縁帯も張り出している。内面播目には炭化物の付着が著しい。

17は土師質焙烙である。口縁部は丸くおさまり、口縁のやや下がったところに2孔の穿孔が対であり、片方は内面から、もう一方は外面からの穿孔である。外面には粗いなでによる凹みが2条認められる。18は備前焼の甕である。口縁部は胴部から直に立ち上がり、端部はやや肥厚し、内側へ緩やかに凹みながら傾斜し、受口状に作る。外面には藁の痕跡が残る。19は丸瓦である。凸面狭端縁連結面から1.9cmの位置に「六瓦佐」の刻印がある。この刻印は淳心学院地点をはじめとする城下町跡の調査でも何例か出土しており、龍野町六丁目在住の瓦師苦瓜佐四郎の刻印である〔姫路市教委2007〕。20は砥石である。21は寛永通寶、寶の足は「ス」である。

22は椀の木地であろうか。内外面とも轆轤による成形痕が明瞭に残り、高台部の成形も行っているが、未製品の印象を受ける。見込みには井桁状の掘り込みが認められ、切り合いから線刻が2回施されたことがわかる。木目が顕著でないため、木取りは判然としない。23は何らかの台であろう。断面台形を呈し、中央部に貫通する孔を穿っている。孔の両端には、掘り込みが認められ、一方には、木製の楔が残存している。24・25は桎目材を使用した円板である。曲物の底板であろう。25の周縁は腐食のため遺存状態は悪い。

26は赤漆塗りの腰丸椀である。口縁部を欠くが、腰が張り、器壁はほぼ垂直に立ち上がるものと想定される。木取りは横木取りで、畳付を除き赤漆が塗られている。無文である。27は連菌下駄である。縦木取りで、台部には鼻緒を装着するための孔が3ヶ所穿たれている。菌は磨り減りわずかに残存しているにすぎない。28は板目材を使用した樽の蓋である。栓は未検出である。蓋は板材を組み合わせたもので、連結用の柄穴が2ヶ所に認められる。

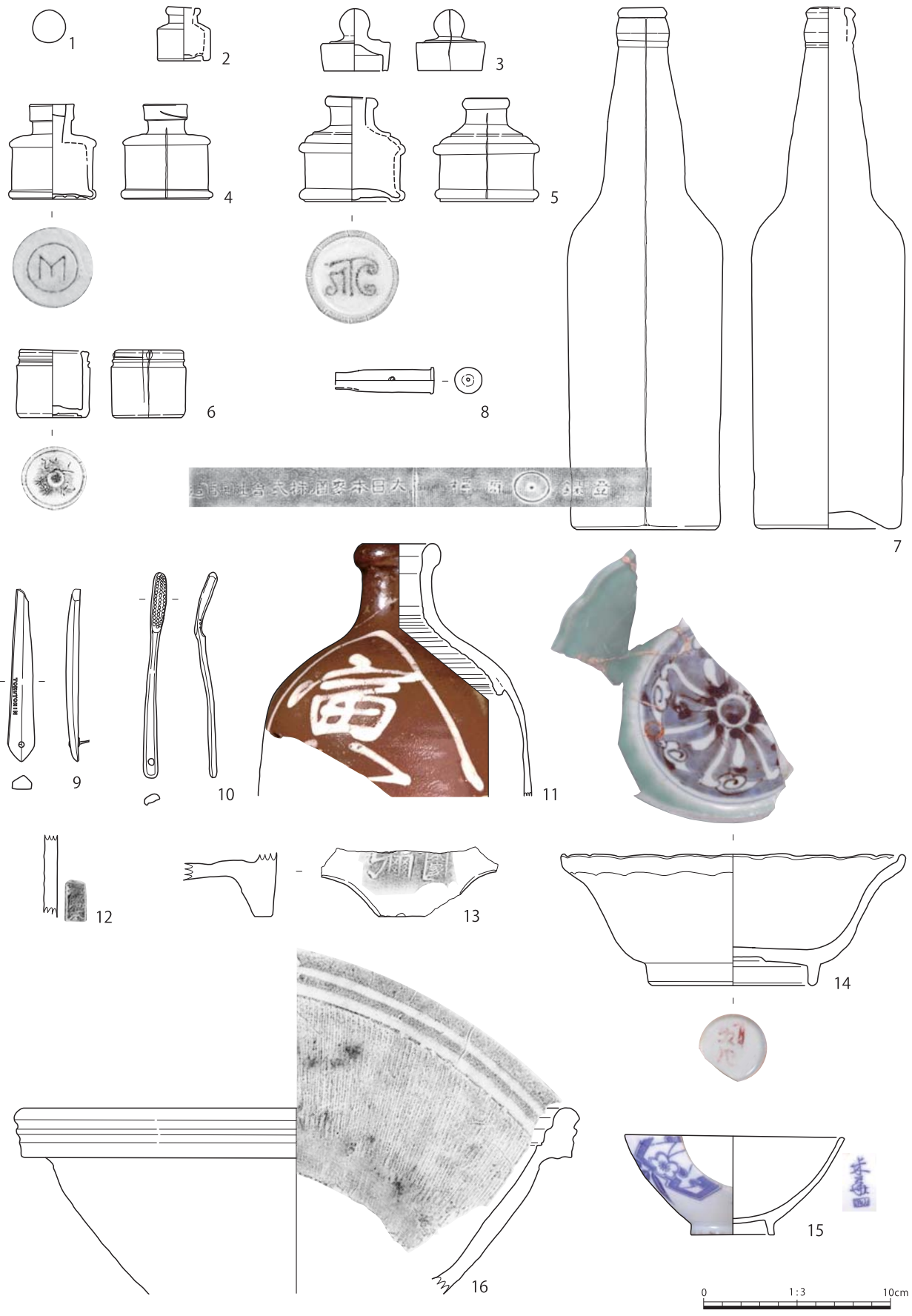


図7 トレンチ1 堀内堆積土 出土遺物(1)

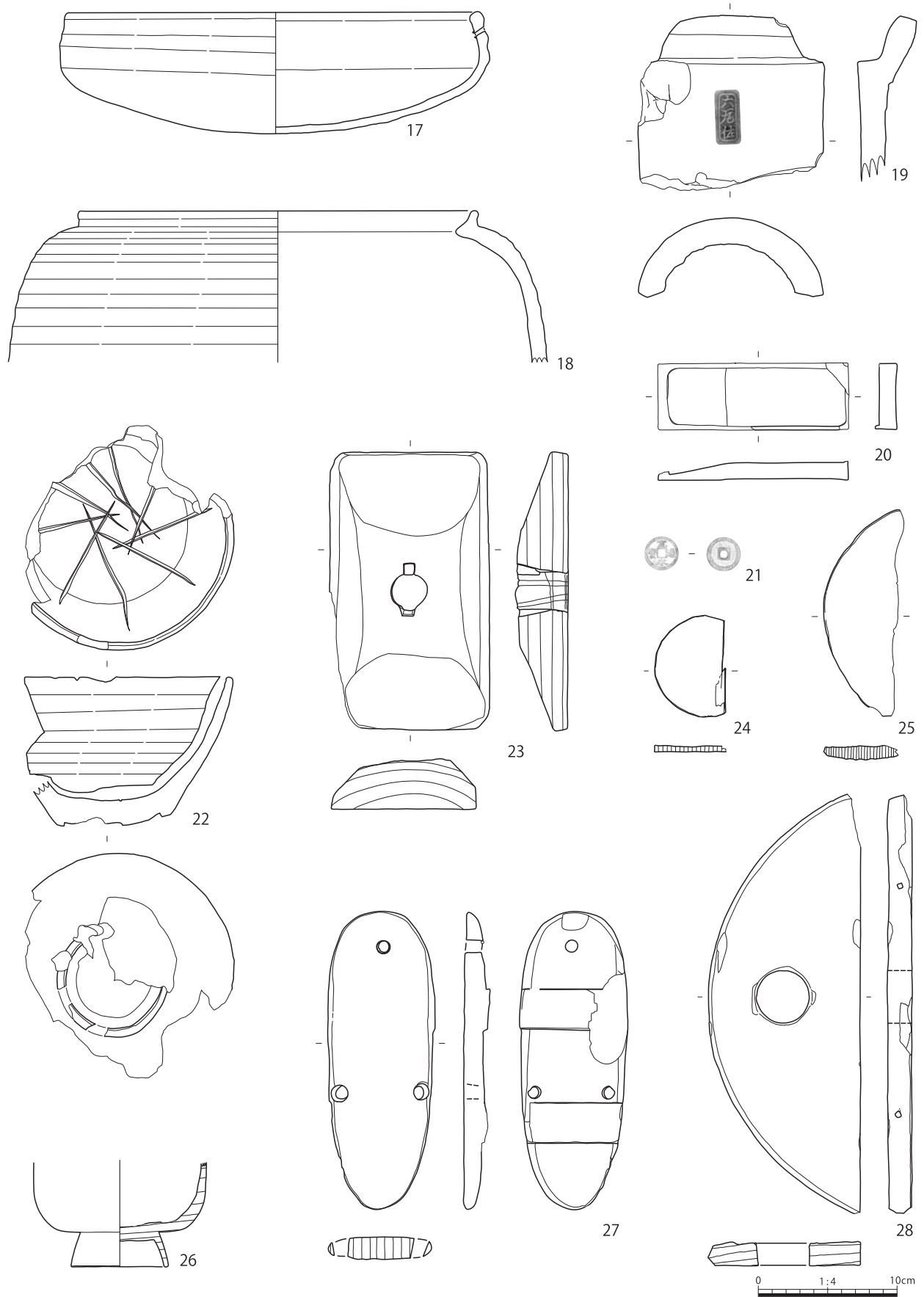


図8 トレンチ1 堀内堆積土 出土遺物(2)

トレンチ 2

調査地にはかつて建物があったため、現地表から最大で2.3m下まで攪乱を受けていた。トレンチ北側の堀内にあたる部分は約1.5mまでの攪乱を受けていた。その下部には、トレンチ1と同様の堀内堆積土が確認できた。ただし、調査の安全を確保するため堀の大半は未掘とし、中堀石垣の周辺のみを掘り下げて調査した。石垣の付近から攪乱を含む近現代層が更に深くなり、石垣はかろうじて基底石と壁面でその上部の2石目が確認できた。限られた範囲であるため、断定はできないが、上部の石材は基底石よりも小さく、やや前面に出ている印象を受ける。基底石の大きさは前面の幅40～50cm、控長50～55cm、厚さ約25cmを測り、石材の長手を控えとして設置している。この石材はトレンチ1で検出された石材に比べ厚みがある。トレンチ1の下段の石材は、トレンチ2の2石目の石材に近い感触を受ける。

石材の南側において、黄褐色砂のベースが検出されたことから、この石材は地山に据えられていると考えられる。この成果から調査地点周辺の南岸石垣の最下部の標高は、検出した石材下部の11.6m前後にあることが判明した。この標高は、トレンチ1で確認した最下段の石材の標高11.4mと大きく矛盾しない。また、石垣の前面には堀の堆積土が確認でき、トレンチ1と同様に検出した石材の前面下部にも堆積していることから、堀底は更に下がることを確認した。石垣の掘方については攪乱のためはっきりと確認できなかったが、後述する試掘坪3の成果から本来の地山が標高12.5m付近にあることを考慮すると、石垣の南側にある6層が掘方埋土である可能性は高い。石垣前面の堀内堆積土からはトレンチ1と同様に多くの遺物が出土した。石垣前面に堆積している4層からは、砂目積みの肥前陶器などの17世紀前半の遺物も出土している。

29は肥前陶器の碗である。畳付以外施釉しており、高台内には兜巾が認められる。高台には砂が付着している。30は肥前陶器の碗である。畳付には轆轤から切り放す際の糸切り痕が認められる。高台脇には釉着が認められる。31は肥前陶器の皿である。見込みに4ヶ所の砂目跡がある。高台は露胎。32は肥前陶器の皿である。見込みには砂目跡があり、高台内には「大」の墨書がある。33は京・信楽系陶器の筒形碗である。胴部には錆釉により2条の横線を施す。34は肥前磁器の丸形碗である。畳付は露胎、見込みは蛇の目釉剥ぎ、外面に梅樹文を描く。35は肥前系磁器碗である。高台は比較的高い。畳付には砂付着、口縁内面に2条の圏線、見込に圏線、外面は山文を描く。36・37は左三つ巴文軒丸瓦である。38は堺・明石系の播鉢である。色調は赤褐色を呈し、内面底部には8単位の播目を放射状に配する。39は備前焼の播鉢である。口縁帯は外方へ拡張し、胴部との境に重ね焼きの溶着痕が残る。播目はほとんど残存していないが、斜め方向に施していると考えられる。40も備前焼播鉢である。口縁内面に段が明瞭に認められ、外面の凹線は2条施される。下顎部には重ね焼き時の溶着痕が認められる。播目は6単位で施され、その間隔は広い。

41は板目材を使用した円板である。端部は下方がやや広がるハ字状を呈している。曲物の底板と想定される。また、凶化していないが曲物のへぎ板の細片も出土している。42は箸であろう。折れているため全長は不明であるが、折れた部分では11面に面取りを施している。先端から3cmまでは面取りが確認できないことから、先端部は研磨して円形にしたと考えられる。

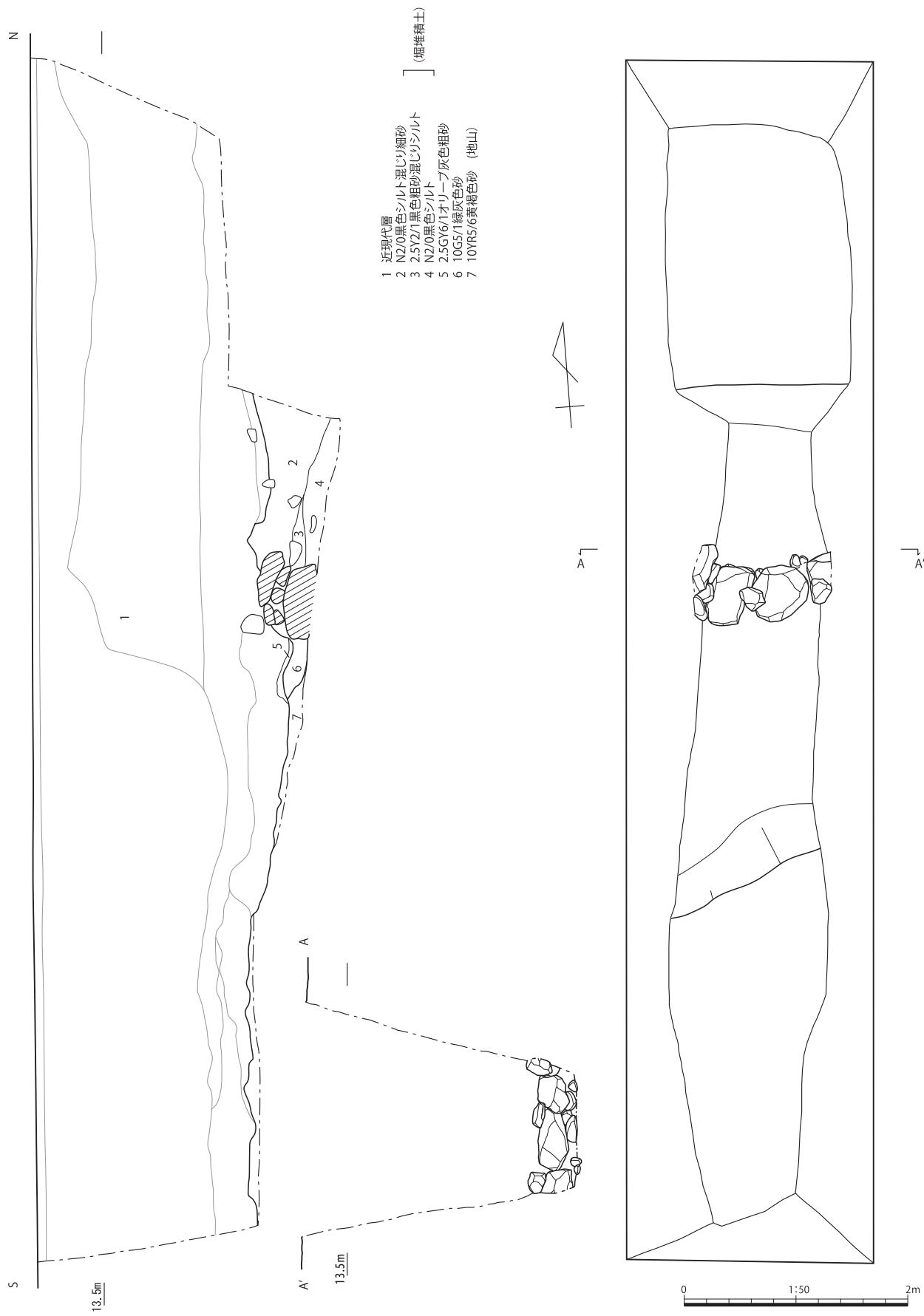


図9 トレンチ2 平・断面図

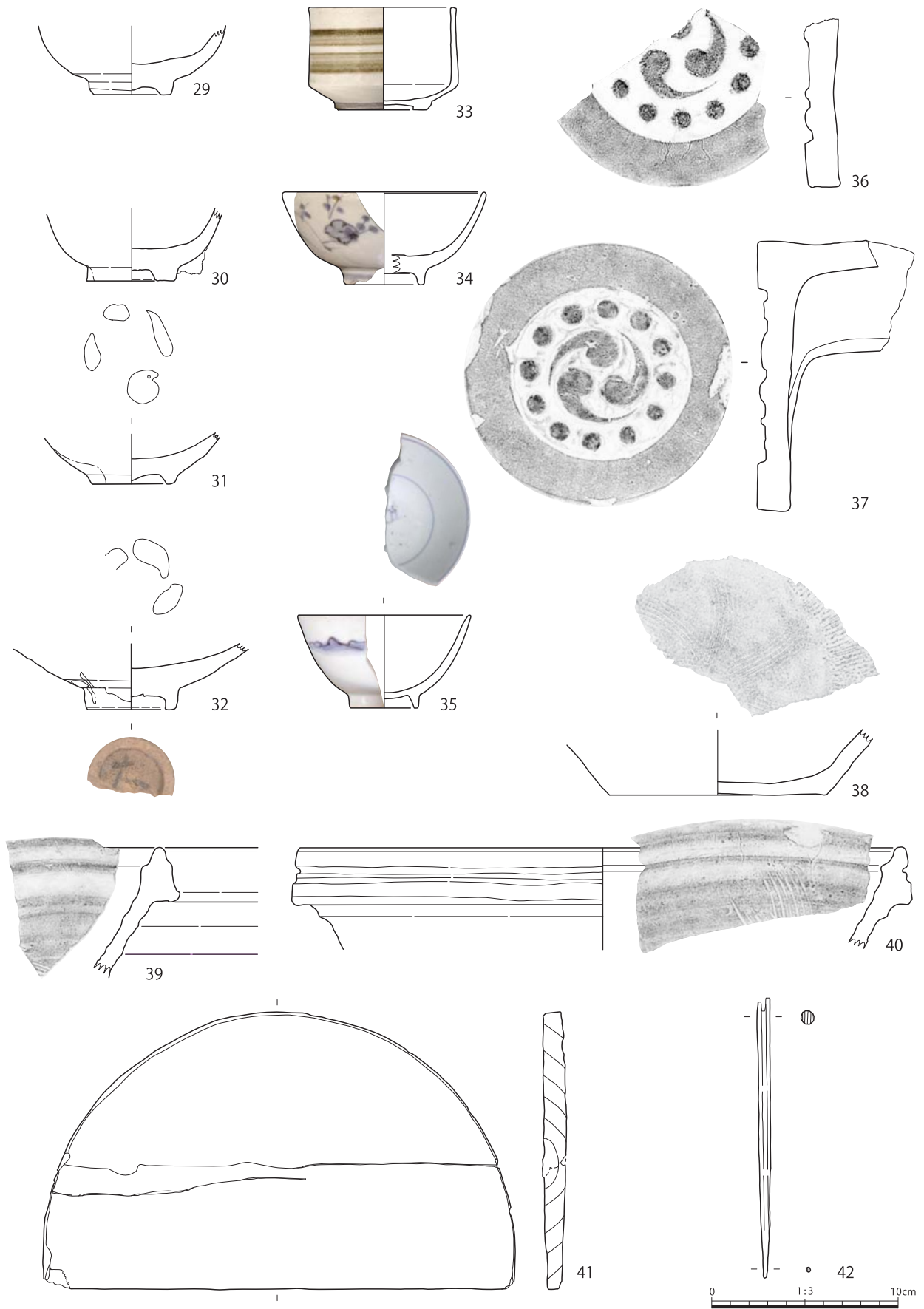


図10 トレンチ 2 堀内堆積土 出土遺物

トレンチ 3

トレンチ 2 の東に位置する。現地表から約 2.6m まで攪乱を受けていた。トレンチ 3 は近現代層の締まりが悪く崩落の危険性があったため、最下部の調査幅は 50cm である。標高 11.5m において径約 50cm、厚さ約 25cm の円形の石材が 1 石確認された。隣接する石材もないため攪乱により動いている可能性が高く、原位置を保っているとは考えにくい。ただし、この石材の南側には地山である砂礫層が確認できること、北側には堀内堆積土が検出されたことから、この付近が中堀南岸である可能性が高い。堀内からは長さ約 40cm、幅約 30cm の石材が検出されるなど、周辺には石材が散乱しており、他のトレンチとは様相が異なっている。遺物は堀内堆積土である 2 層から出土した。

43 は肥前陶器の碗である。腰部で折れて直線的に開きながら立ち上がり、口縁部はやや外反する。畳付を除き全面施釉で畳付には砂が付着している。44 は肥前陶器の碗である。底部を欠いている。器形は外方へゆるやかに開きながら立ち上がり、口縁部は外反する。45 は備前焼の盤である。体部外面には指おさえによる凹みが巡る。

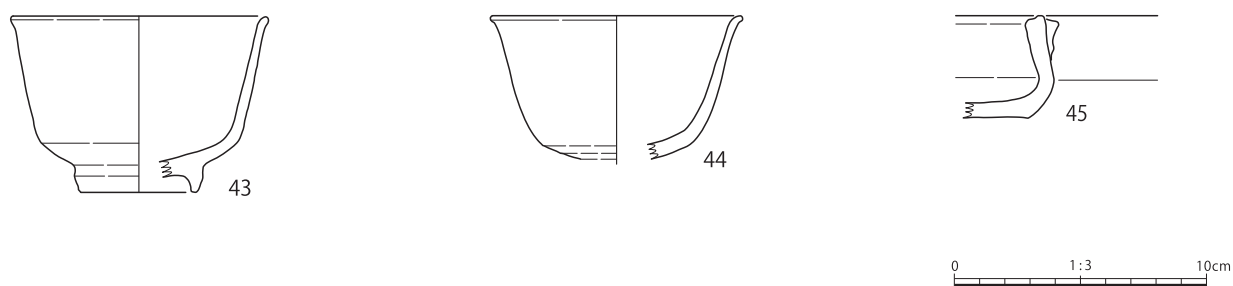


図11 トレンチ 3 堀内堆積土 出土遺物

第 3 節 試掘坪の遺構と遺物

試掘坪 1

トレンチ 1 の南側に位置する。トレンチ 1 同様、近現代層を経て江戸時代の整地層に至る。土坑を 1 基検出した。整地層中から 46・47 が出土した。46 は堺・明石系播鉢である。内面の段は明瞭でなく、わずかな凹みとなっている。播目のナデ消しは弱く、口縁部に播目の痕が残存している。47 は内外面とも暗紫色の鉄釉がかけられている。口縁部は逆台形を呈している。大谷焼の甕である。

試掘坪 2

坪 1 の南側に位置する。土層の堆積状況はグリッド 1 と同様である。近現代層直下の検出面で石列あるいは礎石と想定される石材を確認した。この調査区では、更に下層の遺構の状況を把握するため、検出した石列を避けて、坪の南側において断割りを行った。壁面観察から断割り内の西側で、検出面の下に灰黄褐色シルトと灰白色シルトの互層が確認された。固く締まっており、土間の可能性がある。

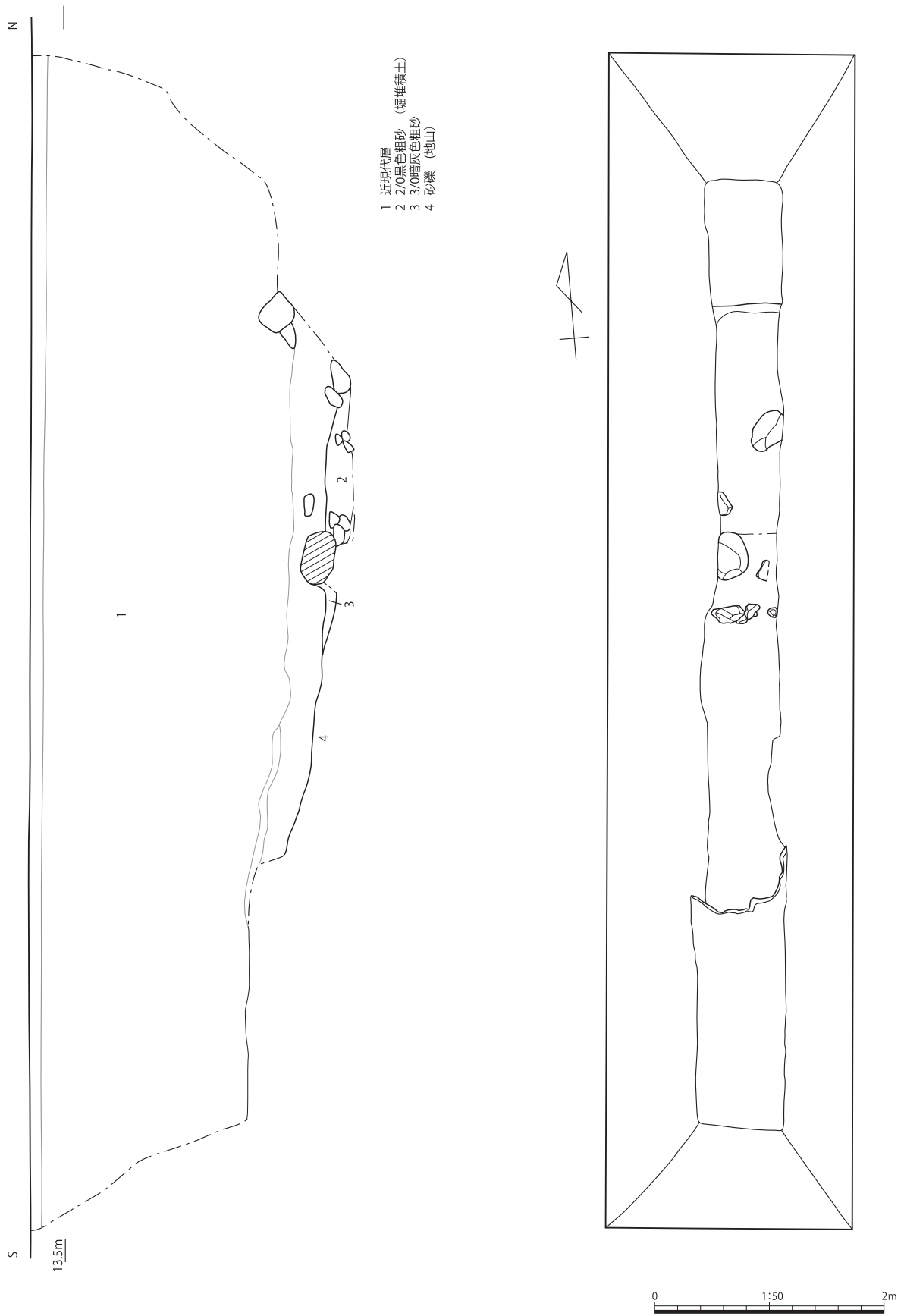


図12 トレンチ3 平・断面図

また、江戸時代の遺構の下位には中世段階と考えられる旧耕土、床土があり、標高12.5mで黄褐色砂の地山を確認した。時期は不明であるが、地山を掘り込む遺構も検出され、江戸時代の遺構面を含め、少なくとも遺構面が5面存在することが確認できた。

3層の遺構埋土から遺物が出土した。48は京・信楽系の灰釉端反碗である。49は堺・明石系播鉢の片口部分である。片口は外方へは拡張せず、内面がわずかに凹む。

試掘坪3

トレンチ2の南側に位置する。試掘坪1・2同様、整地層の下から江戸時代の遺構面が検出された。江戸時代の遺構面の下に坪2同様、旧耕作土及び床土が確認でき、標高12.5mで黄褐色細砂の地山が検出された。

この調査区では、遺構を調査した。50～54はSK01からの出土である。SK01は調査区西側に延び全容は判然としないが、調査範囲内で幅1.2m、深さ1mを測る。50は磁器小碗である。高台内には「四二」の朱書が認められる。51は染付輪花碗である。見込には欠損しているが、獅子文が描かれていると思われる。蛇ノ目凹形高台で高台内には「々」の朱書がある。52は染付丸碗である。内面には雷文、外面には草花文。50～52はいずれも白子で焼継がなされ、高台内に書かれた朱書は焼継印である可能性が高い。53は萩焼のピラ掛け碗である。54は行平である。持ち手と直交して片口がつく。

55・56はSK04からの出土である。SK04は調査区の東側で一部が検出された。上部は攪乱のため判然としないが、下部は残存しており直径60cm以上を測る。55は底部糸切りの土師器皿である。56は肥前陶器の大皿である。

試掘坪4

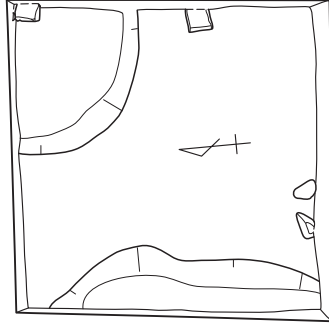
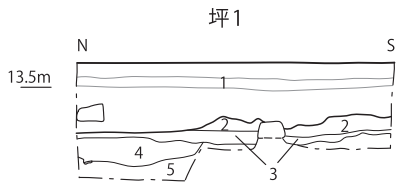
坪3の南側に位置する。現地表下2.4mまで攪乱を受けており、江戸時代の遺構・遺物は全く確認できなかった。砂礫層を標高11.6mで確認した。

試掘坪5

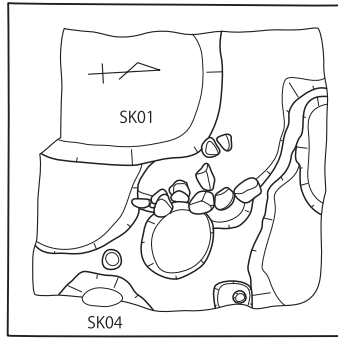
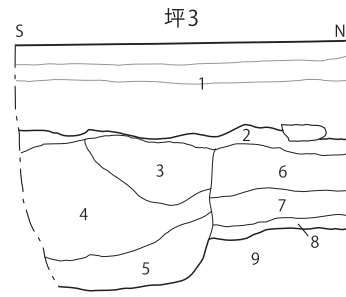
坪3の東側に位置する。現地表から1.1mまで攪乱を受けていた。黄褐色土の地山は検出されず、標高12.7mで砂礫層が確認された。砂礫層上で、土坑1基、ピット1基を確認した。遺構に伴っての明確な遺物の出土は認められなかったが、遺構検出中に57・58が出土した。57は肥前系陶器碗である。全面に火を受けている。58は丹波焼の播鉢である。縁帯部には凹線2条が巡り、下端は外方へ張り出し、播目は6単位である。調査区西端の断割り部分からは、江戸時代以前の遺物が出土している。59・60は口縁下に三角形の凸帯を持つ土師器塙である。61は布目瓦である。

試掘坪6

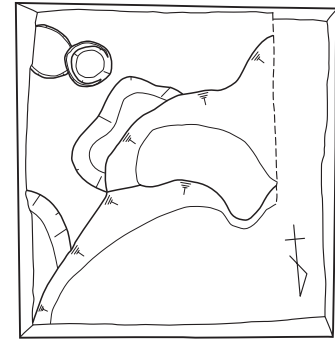
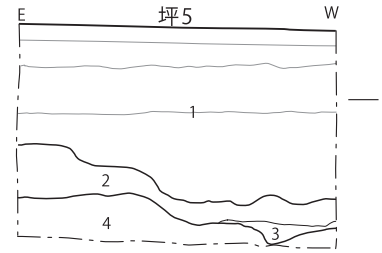
現地表下2.2mまで攪乱を受け、遺構・遺物は確認できなかった。砂礫層を標高11.5mで確認した。



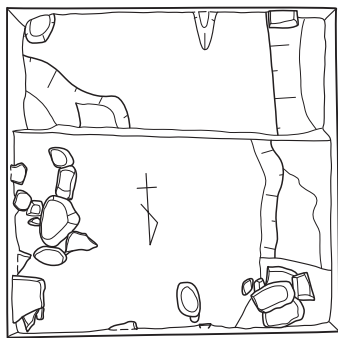
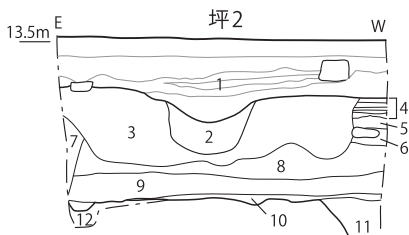
- 1 近現代層
- 2 10YR4/3にぶい黄褐色細砂 炭含む] (整地層)
- 3 10YR3/2黒褐色細砂 炭・瓦含む
- 4 7.5YR5/2灰黄褐色細砂 炭・焼土含む (遺構埋土)
- 5 10YR4/4褐色粗砂 炭含む



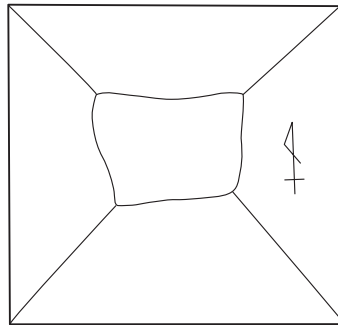
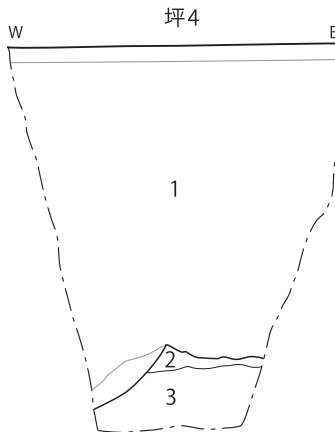
- 1 近現代層
- 2 2.5Y5/2暗灰黄粗砂混じり細砂 炭含む (整地層)
- 3 2.5Y5/2暗灰黄色砂
- 4 10YR4/1褐灰色砂礫] (SK01埋土)
- 5 10YR3/1黒褐色砂礫
- 6 2.5Y3/1黒褐色粗砂
- 7 2.5Y5/1灰色細砂 (旧耕土)
- 8 10YR5/4にぶい黄褐色細砂 (旧床土)
- 9 10YR5/3にぶい黄褐色礫混じり細砂 (地山)



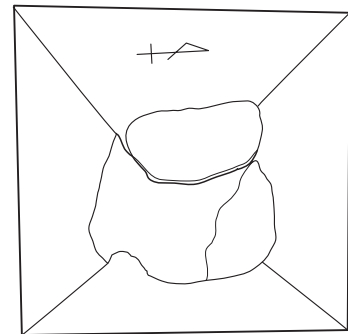
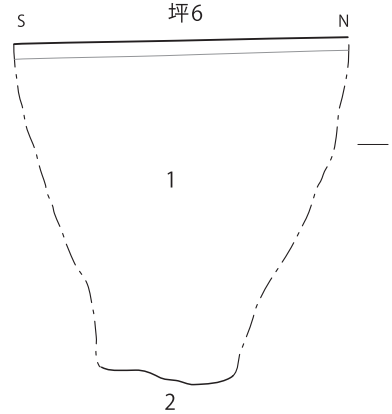
- 1 近現代層
- 2 2.5Y5/2暗灰黄色砂
- 3 2.5Y5/2暗灰黄色細砂
- 4 2.5Y4/1黄灰色砂礫 (地山)



- 1 近現代層
- 2 10YR5/3にぶい黄褐色粗砂 炭含む] (遺構埋土)
- 3 10YR6/3にぶい黄褐色細砂混じり粗砂
- 4 10YR6/2灰黄褐色シルト+10YR7/1灰白色シルトの互層
- 5 10YR6/3にぶい黄褐色細砂] (整地層)
- 6 10YR6/6明黄褐色細砂
- 7 10YR5/2灰黄褐色細砂
- 8 2.5Y5/1灰色細砂] (旧耕土)
- 9 2.5Y5/2灰オリーブ色細砂
- 10 10YR5/4にぶい黄褐色土 (旧床土)
- 11 10YR4/1褐灰色シルト (遺構埋土)
- 12 10YR5/3にぶい黄褐色砂 (地山)



- 1 攪乱
- 2 10YR5/3にぶい黄褐色細砂] (地山)
- 3 砂礫



- 1 攪乱
- 2 砂礫 (地山)

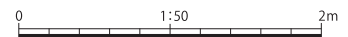
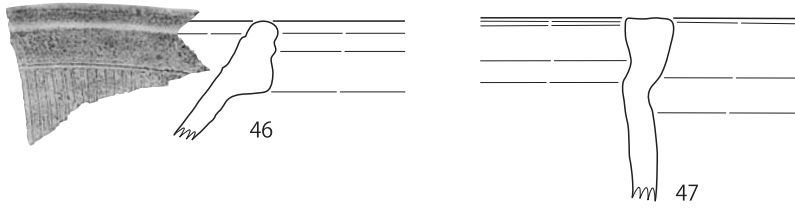


図13 試掘坪 平・断面図

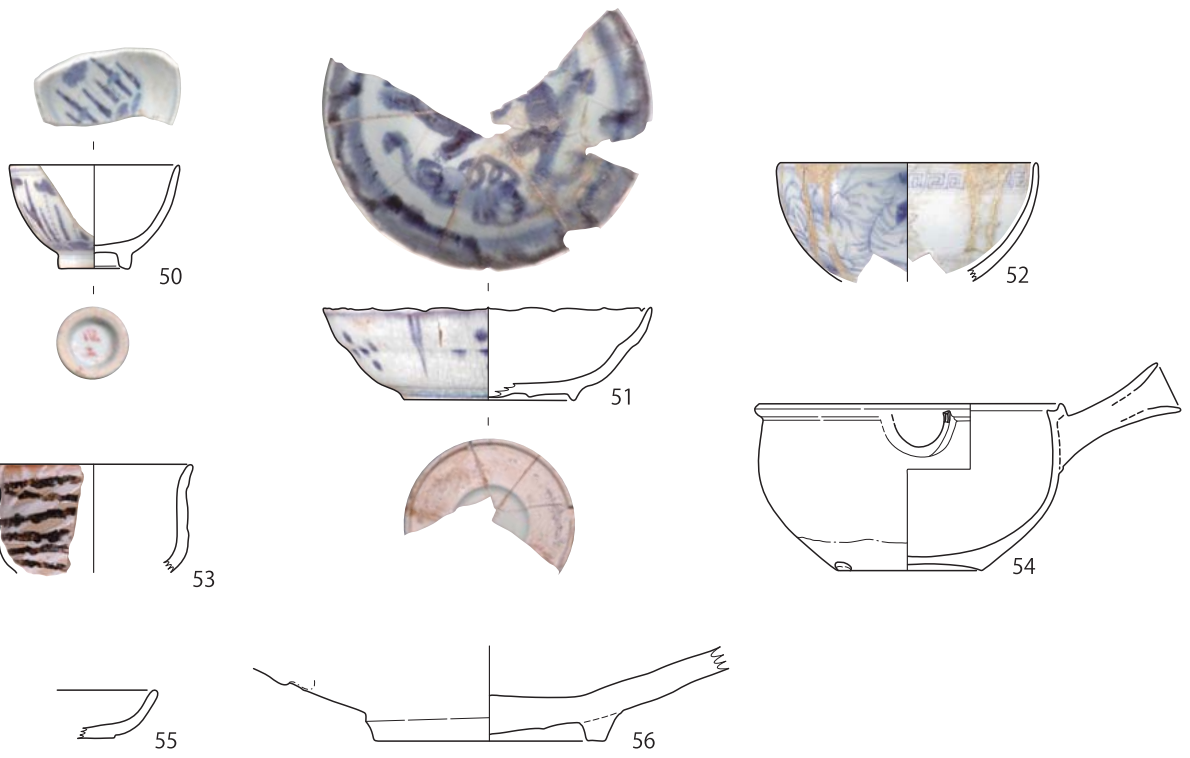
坪1



坪2



坪3



坪5

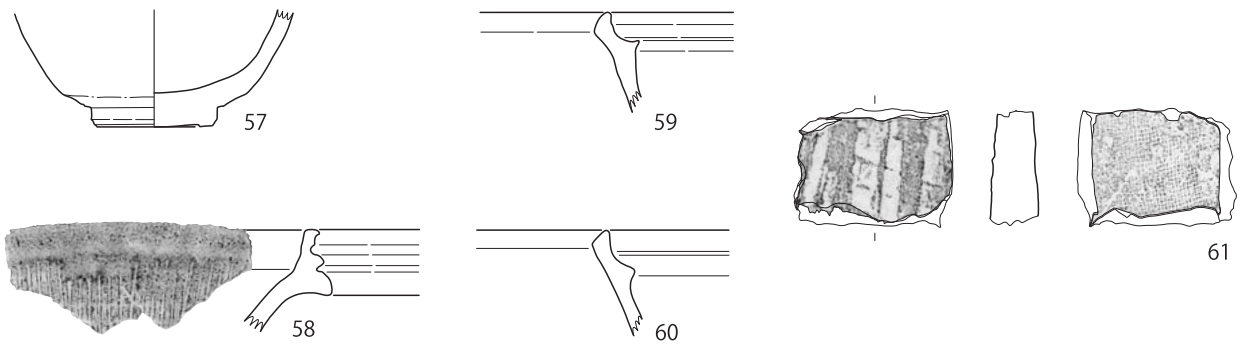


图14 试掘坪 出土遺物

第Ⅳ章 まとめ

調査の成果を挙げると、①一部攪乱を受けているものの、中堀の南岸石垣を検出した。②石垣の最下部は標高11.4～11.6m付近にあり、堀底はそれよりも1m以上下がる。③トレンチ1の石垣の下位に堀内堆積土が確認できる。④屋敷地と石垣との間に約1mの犬走り状の空間が存在している。⑤町屋内の遺構も西側の敷地（トレンチ1、坪1・2）では、良好に残存しており、東側においても一部（坪3・5）では遺構が残存していた。⑥江戸時代の遺構面の下位には、江戸時代以前の遺構面があることが確認できた。

図15は、大正14年作成の地番地図に調査地を重ねたものである。地番地図の正確な縮尺が不明なことから、戦後に行われた区画整理によって周辺の街路幅や敷地の間口等が改変されていることから、調査地の位置を正確に落としたものではないが、現時点で江戸時代の調査地周辺の状況を最も詳細に伝える資料と考えられるため合成した。この図から検出した石垣は、厳密には図面上の中堀ラインとは合わないものの、町屋との位置関係や方向等は概ね地番地図と合致していると判断できる。



図15 調査地合成図（原図は姫路市史編集室所蔵 トレースして使用）

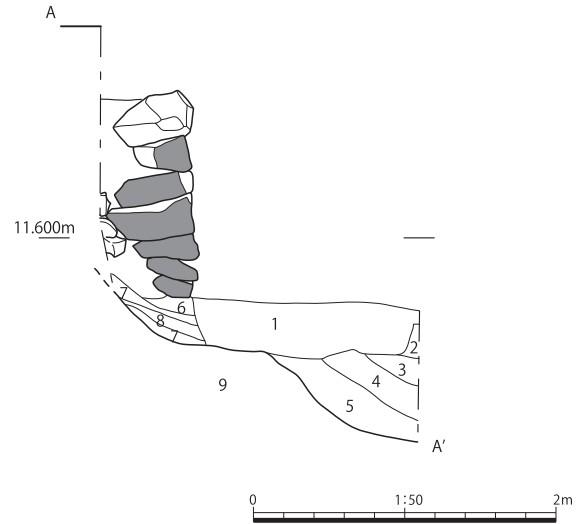
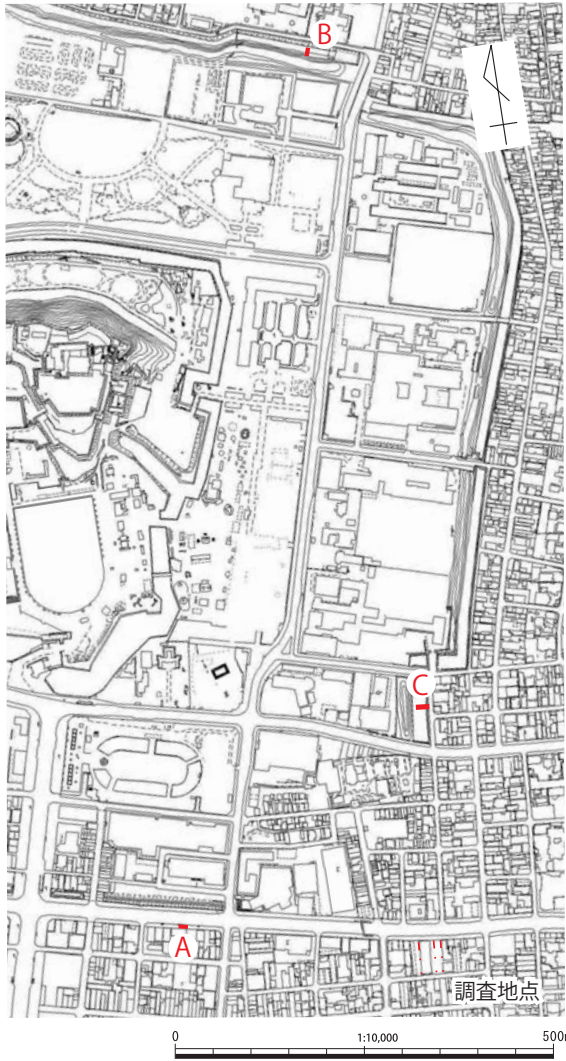
次に検出した石垣について考察していきたい。まず、検出した石垣の事実関係として、トレンチ1においては、石垣の下位に堀内堆積土があること、トレンチ2においては、石垣の前面に堀内堆積土があるものの背後には地山が確認できることである。この点については、調査範囲内では、断ち割りを行っていないため、明確な解答を得ることは困難であるが、図16の第86次調査（以下A地点）で兵庫県教育委員会が調査した成果〔兵庫県教委1988〕を踏まえ考察していく。

A地点では、約13.5mにわたって中堀南岸石垣が検出されている。上部はガス管により破壊されていたが、4～7段の石垣が遺存していた。また、調査区の東端で断ち割りを行っており、中堀南岸の石垣断面が得られている。その断面図によれば、石垣最下段の石は、5～7層の堀の堆積土の上部に構築されている。トレンチ1で検出した石垣下部の様相とこの部分を比較していくと、土層の様相が異なっているため、一概に同定することはできないが、最下段の石の下位に堀内堆積土が観察できる点は両者で共通している。この土層については土層注記にもあるように、「元の」と解釈されており、調査で検出された石垣以前の堀に伴うものと想定されている。堀底の形状は石垣の前面から約50cmほどテラス状にほぼ同じ高さで続き、そこから落ち込んでいる。このことから、堀の最深部より一段高いテラス状の部分に石垣が築かれていることがわかる。また、同調査区の西側（図版7下）においては、このテラス状の地山面に石垣が直接構築されている箇所も多く認められる。このことから、石垣が地山面に構築される場合と堆積土上に構築される場合があることがわかる。今回の調査成果では、トレンチ1の石垣は後者、トレンチ2は前者であるといえよう。また、トレンチ1で確認できた堀底が石垣最下段よりも約1m低い点についても、堀の最深部より一段高くなったテラス状の部分に石垣が構築されていることに起因しているといえる。

また、A地点の調査成果で明らかのように基底石が前面へ0.5～1mズレているものも検出されていることから、本来の石垣ラインは直線ではなく、ある程度前後に波打っていたと想定される。このことは、本来の堀ラインの復元には、ズレを考慮して地点毎に検出した石垣の前後1m程を含めて考える必要があることを示している。それに従えば、今回検出したトレンチ1と2を結ぶラインは、ズレの範囲内におさまっており、図面上の堀ラインと整合する。また、A地点での基底石のレベルについても個別にみれば、上下があることもトレンチ1とトレンチ2の成果と同様である。

A地点の石垣は下から3段までとそれ以上とで、様相が異なることから積み直しが想定されている。下段の石材は幅40～50cm、厚さ25～30cmを測り、石材の様相はトレンチ1よりもむしろトレンチ2の石材の様相に近い。トレンチ1に使用している石材は、積み直しが指摘されているA地点上段の石材と形状等は類似している。このことから、トレンチ1の石垣については、この上段の石垣と同時期に積み直された可能性もある。後述する理由も含めて、A地点西側の下段石垣（トレンチ2）→A地点東側の下段石垣→上部石垣（トレンチ1）との変遷を想定できる。

続いて、堀の全体を見てみたい。図17は第49次調査（以下B地点）と第94次調査（以下C地点）の堀の断面である。B地点は野里門跡西側の調査で、長さ17.3mを測り、堀外郭線から土塁裾部にかけて断ち割っている。土塁側は表土と地山のみで、土塁の盛土は更に上部にあると想定されている。外曲輪側の堀北岸については、地山を急傾斜にカットした土層がみえる。カット部分から南へ約3mのと



- 1 攪乱
- 2 5Y3/1黒褐色シルト (堀埋土)
- 3 7.5GY3/1暗緑灰色砂質シルト 極細砂 (堀埋土)
- 4 N4/0灰色シルト混じり中砂 (堀自然堆積)
- 5 2.5GY4/1~10YR5/6暗オリーブ灰色~黄褐色砂礫 (堀自然堆積)
- 6 N3/0灰色シルト (元の堀の埋土)
- 7 N6/0灰色シルト (元の堀の自然堆積)
- 8 10YR4/6褐色中砂~極粗砂 (元の堀の自然堆積)
- 9 N4/0灰色シルト混じり中砂 (堀のベース)

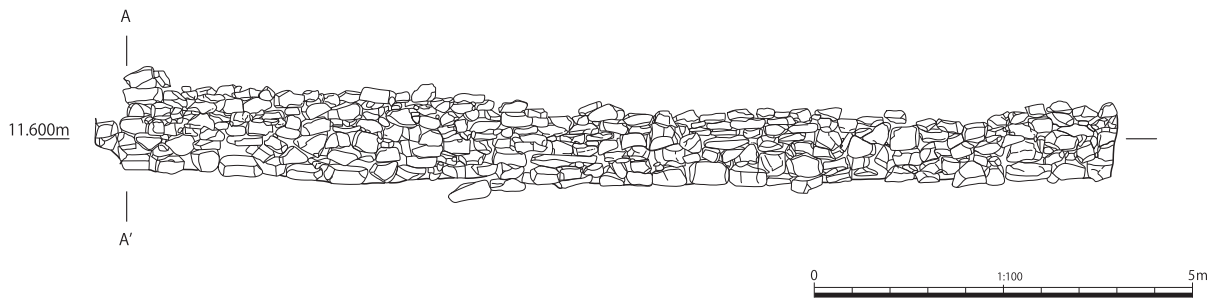
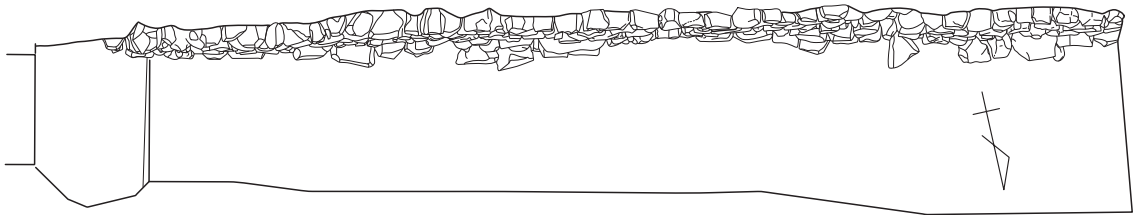


図16 既往の中堀の調査成果 (第86次調査)

ここに杭列があり、堀内堆積土と考えられる灰色粘質土（9層）の存在から、この杭列付近が旧汀線と想定されている。地山のカット部分については、この調査成果からは石垣の存在は明らかでないが、第167次調査において、石垣が検出されていることから掘方であると判断できる。この地点では、現堀埋土と灰色粘質土とが不連続である点から、本来の堀底が浚渫工事によって幾分掘り下げられた可能性が指摘されており、本来の堀底の標高は不明となっている。その点を考慮しても、杭列よりも堀底は明らかに下がっており、石垣は一段高いテラス状の部分に構築されたことが確認できる。

C地点は内京口門跡南側のトレンチである。堀沿いの市道城南76号線の下部にあたる石垣が本来の石垣と想定されており、石垣から土塁部分にかけて東西方向に22.5mを断ち割っている。その断面によれば、土塁側については堀底から緩やかに立ち上がり、外曲輪側は堀底から直接石垣にはとつかず、A地点と同様、石垣前面にテラスを有していることがわかる。テラスの幅は約2mを測る。この調査では、堀の堆積土が約70cm確認され、大きく上部堆積土と下部堆積土とに分けられている。この下部堆積土中からは木簡をはじめとする遺物が大量に出土している。堀底は標高11.2mを測る。

これらの調査成果から姫路城中堀は、基本的に中曲輪側は土塁から直接堀底までつづき、外曲輪側は堀底よりも約1m高いテラス状の段を設け、そこに石垣を構築していたことがわかる。ただし、西部中堀については、第112次調査や第157次調査で明らかになったように、二重構造の石垣を有しており、様相が異なるものと思われる。また、B地点の調査成果からは、石垣の掘方は石垣前面より約3m背後から急傾斜に掘り込んでいることがわかる。

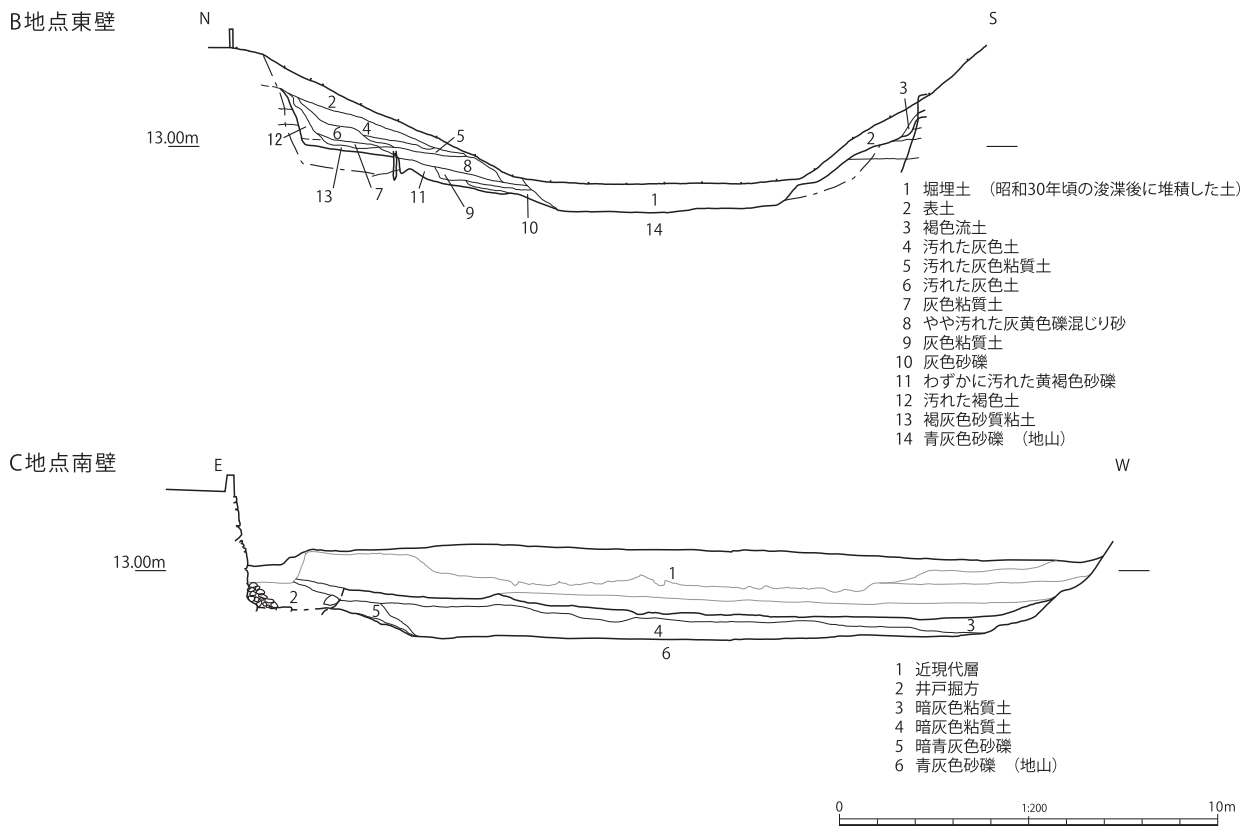


図17 既往の中堀の調査成果（第49・94次調査）

今回の調査において、石垣の下部にあたる堆積土からは、17世紀前半から18世紀後半の遺物が主に出土し、19世紀に下る遺物は少ないことが判明した。このことから、常時水が張る堀内という堆積環境を考慮すれば、新しい時期の遺物の沈降はあるとしても、18世紀後半までに下部堆積土はある程度堆積していたと考えられる。ただし、堀底については、軍事的な用途から堀浚えが行われていたことは想像に難くなく、事実、洪水等の際に崩れた石垣の修理や堀浚え願いが度々幕府に提出されている〔八木1988〕。このことを考慮すれば、堀内堆積土の時期を決定することは厳密には不可能といえる。ただ、調査地点に限れば、史料上洪水等の影響を大きく受けていない箇所であることがわかっている。このことから、調査で明らかになった遺物の時期から、18世紀後半頃には本来の堀底までを浚渫することはなくなり、テラス付近まではほぼ埋まっていた可能性を指摘できる。これを傍証するものとして、巻頭図版2の「姫路城郭惣堀管尺杖間数図」に記載の堀の幅と水深の表記がある。先にみたB地点付近は「堀幅七間半、水深四尺五寸」、C地点付近は「堀幅拾壹間半、水深四尺」とある。同図の端書には、「但六尺五寸間二而堀幅何茂水上之間」とあり、一間を六尺五寸とし、堀幅は汀線で測ったと記されている。この数値をB地点とC地点で検出した堀に、幅を優先して当てはめると、記載の水深は下部堆積土付近でおさまる。その逆に水深を優先すると堀幅が足りなくなってしまうことから、絵図に描かれた水深の数値は、本来の堀底である地山面で検出したものではなく、既にある程度堆積の進んだ下部堆積土内で測ったと考えるほうが素直に理解できる。この絵図は、榊原家に伝来したものであることから、おそくとも第2次榊原氏時代、つまり18世紀前半の史料といえる。この年代は遺物の年代よりも遡るものであることから、今回の調査成果と矛盾せず、本来の堀底である地山までの浚渫は既に行われていなかった可能性を指摘できる。このことから、トレンチ1及びA地点東側下段の石垣の構築時期をある程度、推測できるとともに、地山面に据えられているトレンチ2とA地点西側下段の石垣については、それより遡る可能性は高いといえる。

以上、過去の調査成果を踏まえ、検出した遺構及び中堀について若干の検討を加えた。その結果、今回の調査で検出された石垣については、姫路城の南部中堀南岸を構成するものであり、その様相は、これまでに検出されている南岸石垣と同様であるといえる。また、トレンチ1とトレンチ2の石垣の様相の差は、積み直しを経ていることに起因することも判明した。

南部中堀南岸石垣は、江戸時代を通じて維持されていたが、上部堆積土の遺物から、幕末から堀の埋立までの期間に石垣の下半が埋没したことがわかる。その後、昭和2年にコークス殻や山土によって一気に埋められ、町屋あるいは国道2号となり、今日に至っている。

表4 出土遺物観察表

番号	種別	器種	調査区	出土遺構/土層	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	備考
1	ガラス製品	ビー玉	トレンチ1	9層(上層堆積土)	—	最大径 1.75	—	
2	ガラス製品	瓶	トレンチ1	9層(上部堆積土)	1.85	2.85	2.9	
3	ガラス製品	瓶 蓋	トレンチ1	8・10層(上部堆積土)	3.4	最大径 3.75	3.35	
4	ガラス製品	瓶	トレンチ1	9層(上部堆積土)	2.35	4.7	5.1	
5	ガラス製品	瓶	トレンチ1	8・10層(上部堆積土)	2.8	5.65	5.7	
6	ガラス製品	瓶	トレンチ1	8・10層(上部堆積土)	3.7	3.9	3.7	
7	ガラス製品	瓶	トレンチ1	8・10層(上部堆積土)	2.6	8.0	27.9	
8	金属製品	葉 莢	トレンチ1	8・10層(上部堆積土)	0.85	1.4	5.35	
9	木製品	柄	トレンチ1	9層(上部堆積土)	長さ (9.25)	幅 1.45	厚さ 0.65	
10	プラスチック製品	歯ブラシ	トレンチ1	8・10層(上部堆積土)	長さ 10.95	幅 0.75	厚さ 0.4	
11	陶器	徳 利	トレンチ1	8・10層(上部堆積土)	4.6	最大径 (14.7)	(13.5)	
12	陶器	焜 炉	トレンチ1	9層(上部堆積土)	—	—	(4.8)	弥七焜炉
13	陶器	焜 炉	トレンチ1	9層(上部堆積土)	—	—	(4.7)	弥七焜炉
14	陶器	鉢	トレンチ1	8・10層(上部堆積土)	18.4	9.05	7.0	V期
15	陶器	碗	トレンチ1	9層(上部堆積土)	11.8	4.4	5.4	
16	陶器	播 鉢	トレンチ1	8・10層(上部堆積土)	(30.2)	—	(9.9)	堺・明石系 II型式
17	土師器	焙 烙	トレンチ1	11層(下部堆積土)	29.3	最大径 30.9	8.7	
18	陶器	甕	トレンチ1	11層(下部堆積土)	(28.6)	—	(11.0)	備前焼
19	瓦	丸 瓦	トレンチ1	11層(下部堆積土)	長さ (12.65)	幅 (13.4)	(5.7)	
20	石製品	硯	トレンチ1	11層(下部堆積土)	長さ 13.7	幅 4.7	1.6	
21	銅製品	銭	トレンチ1	11層(下部堆積土)	2.4	—	厚さ 0.9	古寛永
22	木製品	椀	トレンチ1	8・10層(上部堆積土)	(17.4)	8.2	(10.7)	
23	木製品	不 明	トレンチ1	8・10層(上部堆積土)	11.5	20.0	3.65	
24	木製品	曲物底板	トレンチ1	9層(上部堆積土)	長さ 7.3	幅 (5.1)	厚さ 0.45	
25	木製品	曲物底板	トレンチ1	9層(上部堆積土)	長さ (15.3)	幅 (5.3)	厚さ 1.0	
26	木製品	椀	トレンチ1	11層(下部堆積土)	12.4	7.0	7.8	
27	木製品	下 駄	トレンチ1	11層(下部堆積土)	長さ 21.5	幅 7.7	1.9	
28	木製品	樽 蓋	トレンチ1	11層(下部堆積土)	長さ (30.1)	幅 (11.0)	1.7	
29	陶器	碗	トレンチ2	堀内堆積土	(10.0)	4.1	(5.2)	II - 1 ~ II - 2期
30	陶器	碗	トレンチ2	堀内堆積土	(9.5)	4.65	(3.9)	I - 2 ~ II期
31	陶器	皿	トレンチ2	堀内堆積土	(9.4)	4.3	(3.7)	II期
32	陶器	皿	トレンチ2	堀内堆積土	(12.6)	4.7	(3.5)	II期
33	陶器	碗	トレンチ2	堀内堆積土	7.9	4.2	5.5	京信楽系 4期
34	磁器	碗	トレンチ2	堀内堆積土	(11.0)	4.2	(4.95)	V期
35	磁器	碗	トレンチ2	堀内堆積土	(9.2)	3.6	(5.0)	IV期
36	瓦	軒丸瓦	トレンチ2	堀内堆積土	(9.05)	—	厚さ 1.75	
37	瓦	軒丸瓦	トレンチ2	堀内堆積土	14.5	(8.4)	厚さ 1.8	
38	陶器	播 鉢	トレンチ2	堀内堆積土	(16.6)	11.6	(3.5)	堺・明石系
39	陶器	播 鉢	トレンチ2	堀内堆積土	—	—	(7.0)	備前焼 近世2期
40	陶器	播 鉢	トレンチ2	堀内堆積土	(32.2)	—	(5.4)	備前焼 近世2期
41	木製品	曲物底板	トレンチ2	堀内堆積土	長さ 25.3	幅 (14.9)	厚さ 1.3	
42	木製品	箸	トレンチ2	堀内堆積土	(15.0)	—	0.7	
43	陶器	碗	トレンチ3	堀内堆積土	(10.0)	(4.6)	7.0	II - 1 ~ II - 2期
44	陶器	碗	トレンチ3	堀内堆積土	(9.8)	—	(5.9)	
45	陶器	盤	トレンチ3	堀内堆積土	—	—	(4.05)	備前焼
46	陶器	播 鉢	坪1	遺構面検出	—	—	(4.2)	堺・明石系 III型式
47	陶器	甕	坪1	遺構面検出	—	—	(7.2)	大谷焼 III型式
48	陶器	碗	坪2	断ち割り	(9.0)	(3.7)	5.05	京信楽系
49	陶器	播 鉢	坪2	断ち割り	—	—	(3.9)	堺・明石系 II型式
50	磁器	碗	坪3	SK01	(6.8)	(3.8)	4.1	
51	磁器	輪花皿	坪3	SK01	13.0	6.8	3.65	
52	磁器	碗	坪3	SK01	(10.4)	—	(4.7)	
53	陶器	碗	坪3	SK01	(7.9)	—	(4.25)	萩焼
54	陶器	行平	坪3	SK01	11.9	(5.8)	8.25	
55	土師器	皿	坪3	SK04	—	—	(1.9)	
56	陶器	皿	坪3	SK04	(18.5)	9.0	(3.75)	I期
57	陶器	碗	坪5	遺構面検出	(11.0)	4.8	(4.65)	II期
58	陶器	播鉢	坪5	遺構面検出	—	—	(4.0)	丹波焼 IV A類
59	土師器	埴	坪5	断ち割り	—	—	(4.0)	
60	土師器	埴	坪5	断ち割り	—	—	(4.2)	
61	瓦	平瓦	坪5	断ち割り	(6.25)	(4.55)	最大厚 (1.8)	

引用・参考文献

- 江戸遺跡研究会 2001『図説 江戸考古学研究事典』柏書房株式会社
- 大橋 康二 1994『古伊万里の文様』理工学社
- 川口 宏海 1992「有岡城跡・伊丹郷町遺跡出土の近世丹波焼製品」『榑崎彰一先生古希記念論文集』 ※
- 九州近世陶磁学会事務局 2000『九州陶磁の編年』九州近世陶磁学会 ※
- 北垣 聰一郎 1992「姫路城中濠の水系に関する一考察」『城郭研究室年報』Vol.1 姫路市立城郭研究室
- 工藤 茂博 2002「帝国陸軍、降参ス 中堀埋立事情」『城踏』No.38 姫路市立城郭研究室
- 桜井 準也 2006『ガラス瓶の考古学』有限会社六一書房
- 白神 典之 1990「堺摺鉢と明石摺鉢」『江戸の陶磁器』江戸遺跡研究会 ※
- 田中 眞吾・成瀬 敏郎 1998「地形」『姫路市史』第7巻下 資料編自然 姫路市
- 中島 千進 1989『姫路名産 弥七こんろ』郷土文化学会報告・第二冊 郷土文化学会 ※
- 難波 洋三 1992「徳川氏大坂城期の炮烙」『難波宮址の研究 第九』(財)大阪市文化財協会
- 乗岡 実 2002「近世備前焼播鉢の編年案」『岡山城三之曲輪跡-表町一丁目地区再開発ビル建設に伴う発掘調査-』岡山市教育委員会 ※
- 橋本 政次 1994『新訂姫路城史』上・中・下巻 臨川書店
- 長谷川 真 2006「近世丹波焼の諸相」『江戸時代のやきもの-生産と流通-』(財)瀬戸市文化振興財団埋蔵文化財センター
- 畑中 英二 2006「近世の信楽焼」『江戸時代のやきもの-生産と流通-』(財)瀬戸市文化振興財団埋蔵文化財センター ※
- 姫路市教育委員会 1986『姫路城跡東部中濠保存整備調査報告書』姫路市教育委員会
- 2001『特別史跡姫路城跡-国立姫路病院更新整備工事に伴う発掘調査報告①』姫路市教育委員会
- 2003『特別史跡姫路城跡-国立姫路病院更新整備工事に伴う発掘調査報告②』姫路市教育委員会
- 2004『特別史跡姫路城跡-国立姫路病院更新整備工事に伴う発掘調査報告③』姫路市教育委員会
- 2007『特別史跡姫路城跡-学校法人淳心学院整備事業に伴う発掘調査報告書-』姫路市教育委員会
- 姫路市史編纂委員会 1991『姫路市史』第3巻 本編近世1 姫路市
- 1986『姫路市史』第10巻 史料編近世1 姫路市
- 1988『姫路市史』第14巻 別編姫路城 姫路市
- 姫路市立城郭研究室 1998『姫路城絵図展 雄藩姫路の城下と城郭』姫路市立城郭研究室
- 兵庫県教育委員会 1985『特別史跡姫路城跡-兵庫県立歴史博物館建設に伴う発掘調査報告-』兵庫県教育委員会
- 1988『姫路城中濠跡(東邦生命前)発掘調査実績報告書』
- 堀田 浩之 1988「築城プランと基準線」『姫路城史』第14巻 別編姫路城 姫路市
- 八木 哲浩 1988「城と城下町の建設」『姫路市史』第14巻 別編姫路城 姫路市
- 山本 博利 1997「特別史跡姫路城跡 内~中堀濠浄化対策事業(第157次調査)」『城郭研究室年報』Vol.6 姫路市立城郭研究室

※印については、遺物観察表を作成するにあたって参考としたものであり、同表の備考欄に記載した時期については、それぞれの文献による。

圖 版



南東上空より見た姫路城（橋本政次コレクション 大正15年撮影 姫路市史編集室所蔵）



トレンチ1 石垣検出状況（北から）

図版 2



トレンチ 1 堀内堆積土
(北東から)



トレンチ 1 堀内堆積土
(南から)



トレンチ 1 町屋部分
(北東から)



トレンチ 2 全景 (北から)



トレンチ 3 全景 (北から)

図版 4



トレンチ 2・3 全景
(南から)



トレンチ 2 石垣検出状況
(北から)



トレンチ 3 石材検出状況
(北から)

試掘坪1 全景（東から）



試掘坪2 全景（東から）



試掘坪3 全景（東から）



図版 6



試掘坪 4 全景（東から）



試掘坪 5 全景（北から）



試掘坪 6 全景（西から）



第86次調査 調査区東端（北から）（兵庫県立考古博物館所蔵）



第86次調査 石垣検出状況（北西から）（兵庫県立考古博物館所蔵）

図版 8



第49次調査 東壁（北西から）



第94次調査 南壁（北東から）



第94次調査 南壁（北西から）



トレンチ 1 上部堆積土出土遺物



トレンチ 1 下部堆積土出土遺物



トレンチ 2 堀内堆積土出土遺物



坪 3 出土遺物

図版10



トレンチ 1 堀内堆積土出土椀



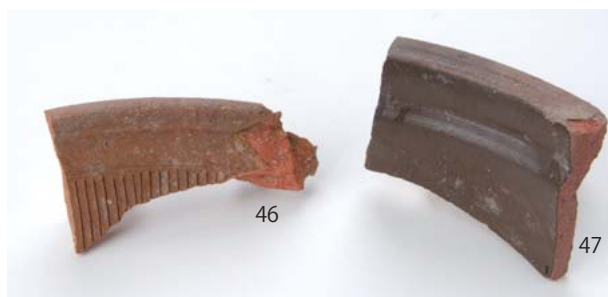
トレンチ 1 堀内堆積土出土木製品



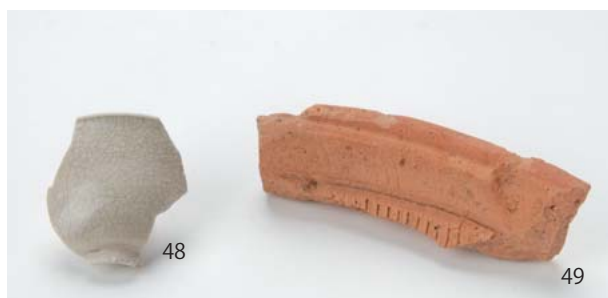
トレンチ 3 堀内堆積土出土遺物



トレンチ 2 堀内堆積土出土木製品



坪 1 出土遺物



坪 2 出土遺物



坪 5 出土遺物

報告書抄録

ふりがな	ひめじじょうじょうかまちあと							
書名	姫路城城下町跡							
副書名	姫路城跡第254次 南部中堀発掘調査報告書							
編著者名	中川 猛							
編集機関	姫路市埋蔵文化財センター							
所在地	〒671-0246 兵庫県姫路市四郷町坂元414番地1 TEL(079)252-3950							
発行機関	姫路市教育委員会							
所在地	〒670-8501 兵庫県姫路市安田四丁目1番地							
発行年月日	2011年3月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査 面積	調査 原因
		市町村	遺跡番号					
ひめじじょうじょうかまちあと 姫路城城下町跡	ひょうごけんひめじし 兵庫県姫路市 もとしおまち 元塩町136-1ほか	28201	020169	34度 49分 54秒	134度 41分 51秒	2008.4.17 ～ 2008.5.16	84㎡	建物 建設
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物			特記事項	
姫路城城下町跡	城館	江戸時代	南部中堀 中堀南岸石垣 土坑	陶磁器 瓦 木製品				
要約	<p>南部中堀の南岸石垣及び町屋内の遺構が検出された。南岸石垣は、最も残りの良い部分で高さ約1.3mを測る。石垣の前面には、堀内の堆積土が確認でき、大きく上部堆積土と下部堆積土に分層された。また、過去の成果を参考にすると今回の調査で検出された石垣については、何度かの積み直しがあることや石垣前面は波打っていることが明らかとなった。</p> <p>また、町屋内に関しても攪乱を受けている試掘坪もあったが、概ね遺構は残存していることが判明した。断ち割り調査によって、江戸時代の下位にも遺構面が存在していることが確認された。</p> <p>調査で明らかとなった石垣を含む中堀については、姫路城を構成する重要な遺構であることから保存協議を行った。その結果、事業者は建設計画を変更し、中堀の南岸石垣以北については、現地で保存されることとなった。</p>							

姫路城城下町跡

— 姫路城跡第254次 南部中堀発掘調査報告書 —
平成23年(2011年)3月31日 発行

編 集 姫路市埋蔵文化財センター
〒671-0246 兵庫県姫路市四郷町坂元414番地1
TEL(079)252-3950

発 行 姫路市教育委員会
〒670-8501 兵庫県姫路市安田四丁目1番地

印刷・製本 丸山印刷株式会社
〒676-8566 兵庫県高砂市神爪1丁目11番33号

